
クローバー

ディライト

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

クローバー

【Nコード】

N6293Y

【作者名】

デイルイト

【あらすじ】

ほぼ普通な高校生、草野春樹（高2）は、自分の大嫌いな栗色髪がきっかけで、学校一のご令嬢であり美少女で、高嶺の花すぎて近寄りがたいと評判の碧原一葉（高2）と出会う。しかしある時、春樹の小さい頃のトラウマと同じ境遇に遭っていた一葉を匿い、ひょんなことからその一葉の妹、二葉（小6）と三葉（小4）の碧原三姉妹と同居することに。ただ、一葉は噂とは違って……。そんな4人と愉快的クラスメイトと織り成す日常ホーム&ラブコメディ。

Prologue (前書き)

初めまして。デライトと申します。小説はド素人どころか読むこともあまりないクセに、どうにもお話が書きたくなってしまった今日このごろ。ふと思い浮かんだこのお話を掲載したいと思います。遅筆、誤字脱字、言い回し等不快な点があるとは思いますが、感想、アドバイスを頂けると嬉しい限りです。どうぞよろしくおねがいします。

Prologue

クローバー

ppppppppp・・・

深い海の奥底から呼び止めるような無機質な機械音。

少し切ない夢を見ていたような気がするが、そんな物語は現実引き戻されると同時にぐちゃぐちゃと形を失う。

「・・・・・・まあ、面倒臭い日々が始まるよ」

余りの怠惰なていたらくで生活していたため、もはや久方ぶりに始まる新学期など面倒臭いを通り越して行く気なし。

俺は「あと10分だけ」という黄金句を布団にしまい込み、重力が3倍にも感じる重い身体を強引に引き起こす。

短針が7をさし、けたましく鳴り響く目覚まし時計を恨めしげに止めてやる。

窓を開け、締め切られて部屋内を今だに夜に保っている雨戸を半ば乱暴に開け放つと、ようやく部屋にも朝が訪れた。

朝からファイト一発な太陽光に眼が眩む。

・・・快晴だ。

これほどに爽やかな朝はなかなかないな。

そう思うと、先程までの眠気はどこへやら。

一つ大きく伸びをするとやけに機嫌も良くなって、俺は颯爽と朝の決まった身支度を始める。

俺は草野春樹、くさの はるき 今日から高校二年生。

もう既に俺の心情でわかって頂けていると思うが、怠け者だ。

怠惰と言う字がこれほどに当て嵌まるヤツはいないんじゃないかというくらいに、俺の自己評価はそれなのだ。しかも気分屋である。

そんなちよっとした質の悪い特徴を除けば、普通の高校生と言えな

くもない。

髪型は少しパーマ掛かったミディアム系統。生れつきの赤っぽい栗色掛かった髪質は、小さい頃から小馬鹿にされるし、教師にはちゃらついているやら不良だなんだなどと小煩く言われる、そんな自分の髪の毛は大嫌いだ。中背でこれといって他に特徴といえるものはない。そんな少しの嫌な特徴を除けば、普通の王道を地で行く俺には不良やらチャラ男など無縁極まりないイメージの筈なのだ。

しかしどうにも人という生き物は見た目で判断するようにできているらしい。

まあコンプレックスってやつだ。

自分の嫌な所のひとつやふたつ誰にだってあるだろ？

さつさとブレザー制服に着替え終えて、俺は朝食の準備を始める。着替える前に食パンにバターを塗り、ハムを乗せてマヨネーズをかける。さらにチーズを重ねてオーブントースターで焼いておく。クロックムッシュというやつだ。その間に、フライパンで目玉焼きを作り、その焼いておいたクロックムッシュに乗せてやれば、時間のない朝食の強い味方クロックマダムの出来上がりだ。

「はふはふ・・・つつ」

焼きたてを急いで頬張って、若干上あごを火傷しながらそそくさと平らげた。牛乳を一気飲みして、腹が膨れれば次は洗い物だ。

この辺で大体気付いてもらえるだろうか？

全然怠け者じゃないじゃないかと？

違う違う、俺が一人暮らしだってことにさ。

母親は2年前、火事で他界。

親父とは・・・まあ色々あって現在別居中。

ちなみにどちらも黒髪である。随分前に母子手帳を見せてもらったことがあるので、養子だとか捨て子だとかそんな訳あり事情はない。親父の方はたぶん海外でバリバリ働いているのだろうが、詳しいことは知らない。繋がりといえば、俺を養うための生活費が俺の口座

に振り込まれるだけのドライな関係。

まあ別にあんなクソ親父のことなんてどうでもいいのさ。

向こうも俺のことなんて、毛ほどの感情も抱いちゃいないだろうし。

俺はただ平穩にのほほんと暮らせりゃそれでいい。

そう思ってたんだ。

歯磨きを済ませ、実験に失敗した化学者のような髪の毛をドライヤーを駆使して整える。部屋を見渡して戸締まり確認。ローファーで足を包み込んで準備完了、いつてきますだ。

二階建てボロアパートの、地上を繋ぐこれまたボロツちい鉄階段をカンカンと音をたてながら降りて行く。すると大家のおばちゃんがアパート前を箒で掃いている。

これもいつもの光景だ。

「おばちゃんおはよ」

俺は初日の出並に明るい笑顔をイメージして声をかけた。

「あらあらハルちゃんはやいのねえ〜。・・・あ、そつかあ〜、もう新学期が始まる頃だったわねえ〜」

この通りふんわりとした口調で、見た目もとろんと蕩けるような表情をするおばちゃんである。よく佃煮やにっころがしをおすそ分けしてくれる、とても優しいお人だ。

母親が亡くなった二年前から、ここに無理を言って急に転がり込んだ俺を厄介者扱いしないで、とても良くしてくれたこのおばちゃんを俺は本当の母親のようであるように大好きなのだ。

「ふふ、新しいお友達ができるといいねえ〜」

眼も口も弓なりにして、温かな笑顔を送ってくれた。もうそれだけでなんだか素晴らしい友達ができそうな気がしてくるので不思議なものだ。

俺とおばちゃんはそれから一言二言他愛のない会話を繰り広げてから別れた。

「いつてらっしゃい」

若干の高台となっている所から、木々の間の下り道路を通つてすぐの麓にある県立花岡高等学校へと足を向ける。麓というほど高い山から下りてくるわけではないのだが、言い回しは間違っていないだろう。歩いて10分の距離ではあるが、木漏れ日の照らす綺麗な森林の中を通る通学というのは悪くない。

「うおーつす、ハルっちゃん！今日も元気に歩いてつか？」

ふと後ろから現れたのは一年時同級生、黒フレーム眼鏡に俺よりもさらに明るい金髪に近い茶髪、右耳にピアス、どでかいヘッドフォン、そして何故か年中身につけている長いマフラーをしたチャラ男オブザチャラ男、筑紫正志だ。^{つくしまさし}俺より少し背が低い、髪のとппをふわりと持ち上げているためにあまり変わりない。

蛍光灯のような笑顔を向けてくる筑紫は、乗ってきたスケートボードを器用に掬い上げると、俺の隣に肩を並べた。

「おう、お前は今日も元気に滑ってんな」

ハイテンションにローテンションでぶつけてやると、へへつと悪戯小僧の風情ではにかむ筑紫。

このチャラ男を極めたような男と普通のスペシャリストである俺が何故つるんでいるのか。それは俺の人生最大の謎であり、決して結託することのないハブとマングースが手を取り合つて生活を共にするくらいあるはずのない現象なわけだが……。

何故だろうな。

でも友人なんてそんなもんだらう。

気が付けば なんてことは・・・まあよくはないか。

「おお二人とも。久しぶりだな。」

麓に降り立つ頃に合流したのは真面目な風貌、トップも寝かせて飾り気のない黒髪無造作ヘア。見た目通りの学業優秀に見た目にそぐわないスポーツ万能。しかし整った顔立ち、優しい表情、そして高身長*さくまけいすけ*のいわゆる才色兼備、イケてるメンズである佐久間恵介が清涼感抜群の笑顔を振り撒いてきた。

「おゝす佐久間、お前も全然変わんねえな」

出会うが早々筑紫がアホな事を吐かす。

春休み程度で友人の姿形が別人になっていたら、そいつの春休みをダイジェスト形式の紙芝居で見せて欲しいものだ。

「当たり前だ。なんたつて俺は普通な高校生であるからな」

腰に手をあて、すんつと反り返りながら自信満々に言う佐久間はやはりどこか抜けているちよっぴり惜しいヤツだ。

「佐久間くゝん、おはよー！」

前を歩いていた女生徒二人組が佐久間に気付いて手を振ってくる。それに応えるようにマイナスイオンでも出てるのではなかるうかというくらいの笑顔で手を振り返す佐久間。

佐久間よ、普通の高校生は登校中に同級生でもない女生徒から「おはよー！」なんて声を掛けられたりしないんだよ。一人で歩いているならまだしもここには俺と筑紫もいるのに。

「・・・余は面白くないぞよ、草野殿」

不愉快を絵に描いたような顔をこちらに向けてくる筑紫。

「世の中不公平じゃな、筑紫殿」

殿様口調の失敗作のように返してやると、筑紫は何かに納得したように腕を組ながら深く頷いた。

「何が不公平なんだ？」

一人会話に加われなかった佐久間が無垢な表情で聞いてくる。これっぽっちの嫌みったらしさが無いのがまた問題だよな。

新学期初日、学校に着いてまずやることといえばクラス替えの張り出し掲示板を見に行くこと択一。今年一年の自分の立場が今日で全て決まるといっても過言ではない、所謂ターニングポイントだ。初対面入学時のクラス分けとは訳が違い、クラスのメンツによっては既にグループ分けが済まされてしまう場合も大いにある。人気者ポジションに昇格する奴もいれば地味めポジションに格下げされる奴もいる。運が悪いと孤立する可能性も有り得る。大人が思っているほど学校生活ってのは甘くない。特に最初は闘いなんだ。

俺も中学でのクラス替えを経験してきているからこそその考えである。「おーおー、わんさか湧いてるのー」

筑紫が山の頂上から下を見下ろすようなポーズで人だかりを眺める。昇降口に入っすぐの所に広いスペースがあり、お知らせなどは全てそこに備え付けてある掲示板に貼り出される。その掲示板の周りには来日したハリウッドスターを取り囲む記者団のように、自分の行く末を見定めようというブレザー服が占拠していた。歓喜の声をあげている者やこの世の終わりなような顔で肩を落としている者も見取れる。

「これは三人で見に行くのはちょっと無理だな」

佐久間が思案顔で顎をつまみながら言う。

「んじゃ筑紫ちよつとスケボーでちゃっっちゃと見てこいよ」

俺がアホな提案をしてやると、不揃いな歯を見せながらグッドサインを出してスケボーに乗り、人垣へと蹴り出して行った。学校内のスケボーは当然禁止であるし、漫画のように人の群れを飛び越えて行くなんてこともできるはずもない。筑紫はあえなく人混みの入

口で急停止し、結局スケボーから降りて自分の身体を強引に割り込ませながら消えていった。

前から思っではいたが、やはりアホだったか筑紫。というかスケボー忘れて行ってるぞ。

「・・・・・・春樹は今年目標とかあるのか？」

二人きりになったと同時に企業面接官のような質問をぶつけてくる佐久間。

「唐突になんだ？相変わらず真面目ちゃんだなあ」

「いや、今日は珍しい事に清々しい表情してるからさ」いつも清々しくなくて悪かったな。

もともとそういう顔なんだよ。

「別にそういうのじゃないけどさ、面倒臭がりの俺としては今日の寝起きが素晴らしく良かったからじゃないか？」

「そうか。じゃあ何かいい事があるかもしれないな！」いい事ね。

登校から不愉快極まりない挨拶イベントがあつたが言わないでおこう。

というか何故お前が嬉しそうなんだよ。

理由を聞いて満足したのか、佐久間は腕を組みながら大きな使命に燃えているような表情で掲示板の方を眺めている。

「うおーい！てへんだてへんだ！」

佐久間と他愛のない話をしていると、江戸っ子が似合わない男ナンバーワンである筑紫が人混みの中から脱出してきた。

「どうだったよ？」

「おう、俺らはまあ問題なく今年も同じクラスじゃ」

田舎の古い学校だから5クラスしかないとはいえ、腐れ縁という物はたいした効力だ。佐久間とは中学一年生の時、筑紫とは中学二年生で同じクラスになり、つるむようになってからは全て同じクラスである。

佐久間と筑紫がハイタッチを交わしているのを眺めながら、しみじ

みと思う。

こんな日常がずっと続けばいい。

新たな刺激なんていらないし、面倒なイベント事も必要ない。

現状維持が一番だってな。

誰だって現時点の状況が最高だと感じていれば、そう思うだろ？

だがしかし、こんな駄作（俺）を作り出しちまった創造神とやらはどうやら大変ご立腹だったらしく……、

「げっ」

いつの間にか佐久間と抱き合っていた筑紫が、俺の更に後方をゴキブリを発見してしまったかのような表情で見定めた。俺も佐久間も釣られて振り向くと、そこに立っていたのは……、

「どきなさい。掲示板が見えないじゃない」

弁慶も土下座物の仁王立ちで腰に手を当て、こえだめを見下ろすような表情で人混みに一声。掲示板に群がっていた生徒は、王様の椅子への道を開ける兵士のように端へと掃ける。道が開けたのを見て、彼女は群衆を平伏させる勢いで、その道の真ん中をずんずんと音が鳴りそうなくらいに堂々と歩いてくる。俺達も周りにならって端に避ける。だんだんと近付いてくる彼女の周りには、お付きの人なのであろうか、うちの制服を着た女の子二人がとことんついて来る。

彼女を一言で言い表せば崇高。

上品で落ち着いていて、それでいて凜とした風情。とてもじゃないが気軽に話し掛けていい雰囲気を感じているとは言い難い。女性の中でも小柄な方だが、それを感じさせないヒマラヤ山脈のように大きな自信に満ちた態度。くりっと真ん丸の水晶のような瞳と、それを護るような長い睫毛。淡いピンクで鈍く光る唇は色気も加わらせ

る。神様がスペシャルオーダーメイドで作製されたのではないか。そんな馬鹿げた事を考えてしまうほどに、彼女は見る者総てを魅了させるのだ。

ただ、俺は彼女の気高く整った容姿だけに魅了されたものではなかった。

何故なら、彼女の柔らかく風鈴のように風に揺られ、サラッと腰の辺りまで滝のように流れる長い髪の毛は、俺と同じ

栗色だった。

子供の頃から馬鹿にされ、父親母親どちらも綺麗な黒髪であることで、遺伝など机上の空論ではないかと思うほどに苦悩したこの髪色。そんな嫌悪感一杯だった栗色は、それが最初から彼女の色であったかのように綺麗なのだ。

まるで西洋人形に魂を宿らせたような、それが彼女の第一印象だった。

「そうそうてゝへんなのはなハルっちゃん、あの娘が同じクラスってことだよ」

佐久間にくつついていた筈の筑紫は、いつの間にか俺の肩に腕を回し青汁を一気飲みしたような顔で彼女を見る。

「あの娘の事知ってるのか？」

「え！？逆にハルっちゃん知らんの？ちゃんと学校通ってたか！？」失礼な、毎日一緒に登校してたろう。

「あの娘は碧原みづはら一葉。一体この田舎の何処にそびえ立っているんだという程の高級住宅に住んでいるみたいで、その正体はなんと大企業社長の御令嬢という噂だ。あの通りお付きの人らしき人物も側近にいるだろ？」

みたいとか噂とからしきとか全部推測じゃねえか。
まあでもそれらしい雰囲気あるもんなあ。

何か住む世界が違うつていうか。

「本当なんでこんな田舎学校にわざわざ通つてんのかね。・・・社会勉強？」

「あの娘の事情はどうでもいいけどよ、なんであの娘と同じクラスなのがてへんなんだ？」

「遠慮してしまうんだよ」

俺が筑紫に問うと、筑紫が答える前に佐久間が口を挟んできた。

「あの通りの性格だし、御令嬢心理も相俟って、クラスの雰囲気が悪くなる。彼女は誰にも心を開かないし、歩み寄ろうとする者もない悪循環・・・」

いつもの爽やか顔は何処かに置いてきてしまったように、愁いを含んだ表情で碧原一葉を眺めている。

「・・・妙に物知り顔だなあ、佐久間」

様子のおかしい佐久間に筑紫が間の手を入れてやる。

するとまた普段の爽やか仮面を付けてにこやかに笑った。

「聞いた話さ」

「ねえ」

思わず後ろにのけ反りそうになった。

俺達が碧原一葉についてひそひそと話していると、彼女はいつの間にか俺達の前に立っていた。

香水の匂いだろうか。彼女が近付くとふわっと鼻をくすぐる香りが舞う。彼女は佐久間と筑紫を一瞥した後、俺を睨むように眺めてくる。なんとなく眼を合わせるのが気まずくなつて、左右に視線をさ迷わせると、佐久間も筑紫も絶滅動物を見たような表情を浮かべている。彼女が人に話しかけるのがそんなに珍しいのか、周りもざわざわと俺達に注目しているようだ。

「・・・その髪の毛・・・・・・地毛なの？」

第二声に再び彼女の方に向き直ると、よくよく見てみれば彼女の視

線は俺の眼ではなくその上……俺のにつくき栗毛に突き刺さっていた。

「……え、ああ、地毛だよ。何もいじっちゃいない」
「へ……」

俺がそう答えると、彼女は関心したように綺麗な瞳を見開いた。

「わたし以外にもこんなに目立つ栗毛がいたなんてね」

彼女は少し笑顔を見せて、長い後ろ髪を翻しながらお付きを引き連れて掲示板へと去っていった。

「……おいおい、驚天動地だぞ……」

先程からずっと俺の肩に腕を回している筑紫は驚きを隠せない様子で口を開く。

それよりもお前がそんな言葉を知っていた事に驚天動地だよ。

「どうやらお気に召されたようだな」

俺の肩にぽんと手の平をあててくる佐久間。

だからなんで嬉しそうなんだよ。

今だざわつく野次馬に睨みを利かせながら、俺は大きく溜息をついた。

ただ、不思議と彼女から負のオーラは感じなかった。

そう、これが俺、草野春樹と碧原一葉との出会いだった。

第1章 (1)

始業式、悠久の時のように感じられる校長の毎年毎年一言一句変わらない演説に耳を傾ける。ただでさえ憂鬱である上に、小一時間前の騒ぎのせいで俺の憂鬱指数はメーターが振り切れる程に上がりきっていた。先程までの清々しさはどうやら底無し沼の奥深くに潜り込んでしまったらしい。そりゃ急に後ろから背中を押されて底無し沼に投げ入れられたら這い上がれないのは当たり前である。朝方誰かがいい事が起きるとか言っていた気がするが、どうやら毎日がいい事だらけである奴の妄言であつたらしい。目立たず騒がず波風立てず生きていたというのに、よりもよって大事なスタートダッシュで豪快に靴紐を踏ん付けてしまうとは。

この後のホームルームも絶対に注目されてしまふに違いないのだ。

始業式も終わり、体育館から次々に生徒が掃けて各々指定されたクラスへと足を向ける。

俺達は2 Dに振り分けられた。

この学校の校舎は3階建ての木造建築が西棟・東棟に分かれていて、所々寂れている辺りが趣ある古さを醸し出している。西棟が主に教室群であり、一階が最上級生の階で階段を多く上らなければならぬ三階は新入生の階だ。俺達は進級したので、今年からは真ん中二階に陣取る。これで階段の労力が少し減るから嬉しい限りだ。ちなみに東棟には理科室や調理室などの移動教室群がある。

「おゝここだここだ」

俺達三人が教室に着くと、既にまばらに新たなクラスメイト達が集まっている。碧原一葉はまだ来ていないようだ。

しかしホッとするのも束の間、俺達が現れた途端、クラスメイトの視線は明らかに俺へと集まる。

「う………、やっぱり朝のアレが原因なのか……？」

いたたまれなくなつた俺は、視線を筑紫に移しながら助けを請う。

「ウーン、あれは確かに衝撃だったからなあ・・・」

そんな感心の言葉は求めてないんだよ。

「というか春樹本当に碧原の事知らなかったのか？」

今だに信じられないというような顔の佐久間。

なんだろうこの皆知っている芸能人を俺だけ知らないという疎外感にも似たこの気持ち・・・。

俺もしかして疎い？

「疎い！」

普段正反対な癖にこういう時だけ息ぴったりなんだこいつらは。

「ちよつとちよつとちよつとそこのお兄さんっ！」

皆の視線が痛い中、一人の女子が片手をひらひら近所のお喋り好きなおばさんのように俺達の方へと近付いてきた。

「ナニナニっ？ ヒトハと知り合いなのかい！？」

やけに滑舌が良くハイテンションな彼女は、肩ぐらいまで伸ばした髪が全体的に外ハネ掛かっていて、前髪を可愛いらしい青い髪止めで抑えている。小顔で上唇が特徴的でどこか猫にも似た雰囲気を感じさせる彼女は、『可愛い村娘』というのがしっくりくる。女子の中では平均的な身長という所だろうか。

「なんかなんか！ 朝来たら何やら大事件の雰囲気！ って感じでざわついてるから何かな」って思ったら、ヒトハがなんと誰かさんとお話ぶつこいてるじゃんっ！ しかも男のコ！ ああヒトハ、アンタ高校デヴィウーならぬ新学期デヴィウー狙っていきなりの逆ナンかい！ とかなんとか思った訳ですよっ！ んでそこんとこどうなんですかいお兄さん！？」

マシガントークでまくし立てる彼女の眼は爛々と輝いていて、まるで初めて好きな子が出来た息子に母親が興味津々で問い詰める様である。

「・・・え、いや、髪の色が似てるねって感じでちよつと声掛けら

れただけで、全くの初対面だよ」

「ありや、ホントだヒトハと髪色同じだあ。染めてるのかい？」

彼女は人差し指を下唇に付けながらハテナマークを浮かべ、俺の髪をジーツと見つめる。

「いや地毛だよ。それよりその・・・碧原の友達なのか？」

「へえデゲ・・・珍しいね！ウン、そうだよっ！親友さ！わたしは
えだむらあおい枝村葵！ヒトハとはもうかれこれ五年の付き合いなんだっ！」

にひひとピースサインを出しながら、太陽も眼が眩むほどの笑顔を向けるくる。

「ヒトハもあんまし人付き合いが得意じゃないみたいでさ・・・。
そうっ！だからこそ今年はロケットダッシュをかましたといっても
いいんだよ！まさか新学期早々からねえ」

俺はというと、ロケットダッシュどころかフライング二回やらかし
て失格になった気分です。

それにしても筑紫もかなりの電力を持っているが、この娘はその十
倍は明るいな。

その大量の電力配給元の発電所をどこに隠し持っているんだ。

少し分けてもらいたい。

「キミたちのお名前は？」

「あ、悪い遅れた。俺は草野春樹。んでさっきから俺に引っ付いて
るのが筑紫正志、こっちのイケメンが佐久間恵介だ」

「よろしく葵ちゃん！」

「よろしくな枝村！」

いきなり馴れ馴れしい筑紫とイケメン否定しない佐久間プラス俺の
紹介が終わるとちょうど予鈴が鳴り響いた。

「おっと！ホームルームが始まっちゃうー！んじゃ今年一年共に頑
張ろー！」

大きく手を振って、枝村は軽いステップで自分の席へと帰って行っ
た。

予鈴と同時にがたがたと椅子を引く音に混じって、俺も自分の席へ

と着く。一番後ろの席のためクラス中を見渡せるのだが、枝村と話し込んでいるうちにいつの間にかまばらだったクラスメイトも全員が揃っていた。

と思いきや、中央のちょうど俺の列の一番前が空席である。いないのはすぐに分かった。

同じクラスであるという碧原一葉だ。

一応顔見知りであることで存在の有無が判明した訳だが、まさか最初のホームルームに遅刻してくるなんてことは……………。

「おっし！最初のホームルーム始めるぞ〜！」
遅刻ですね。

筋肉質な体育会系でノースリーブに下ジャージという体育の先生と言えばこれ！ってほどに王道まっしぐらな先生が、拡声器でも使っているのではないかというくらいの響く声で教室に登場した。

どうやら今年の担任はこのお方らしい。体育で教わったことがないので、前年は違う学年を取り持っていたのだろう。

「今年2 Dを担任することになった、岩崎勲夫だ！今年一年ビシバシ行くから覚悟しとけよ〜！」

え〜〜という生徒の批判も気にせず、岩崎教諭はさつさとホームルームを進める。初日のホームルームということで、やる事といえは各々の自己紹介くらいなもので、その日の学校は午前中で終わりを告げた。

ちなみに自己紹介では筑紫がいきなり笑いを取っていたり、佐久間の自己紹介中には女子達の「今年大当りだよ〜！」という気に入らない声が聞こえたり、枝村が1人1分くらいで終わる簡単なものであるはずなのに、5分も早口で喋っていたりと、それはそれは大盛り上がりだったよ。

そして極めつけは、岩崎教諭がまさかの数学教師だったことだな。まあクラスとしては本当大当りなんじゃないだろうか。

……ん、俺か？

勿論無難な受け答えで早々に「じゃあ、次の人〜」でしたよ。

いいだろう平和だろう？

・・・まあ俺の事はいいんだ。

それよりも一つ・・・気掛かりだったことがある。

その日、碧原一葉が自己紹介することはなかった。

放課後、俺は家へ帰るなり学校指定の通学鞆を玄関先に放り投げると、アパートの敷地内に置いてある自転車を引っ張り出した。これから隣町まで片道30分掛けての買い出しだ。面倒臭がり怠け者である俺にとつちやこれほどまでに苛酷な物はない筈なのだが、俺はこの買い出しが意外に結構好きなのだ。慣れっつてのは本当恐いものだな。

今日は学校も早く終わったため、大変余裕を持って行くことができるのも吉である。通学路でもある木々に囲まれる下り道路を、心地良く風を切りながら走り抜ける。車も殆ど通ることもないため、事故の心配はない。学校前を通り、さらに一つ林を越えると一軒家の住宅が増えてきて、だんだんと人通りも増えてくる。そんな住宅街をゆったりとしたスピードで眺めるのもまた一興。ちなみに学校に自転車で行けばいいと思われる方もいるだろうが、家から遠い人には通学バスが手配されているため、自転車通学は禁則なのだ。

何故かは校長にでも聞いてくれ。

そのまま行くとさらに賑やかになってきて、もう普通の町並みである。ちよつと前までは商店街くらいしかなかったが、今じゃどこかい SHOPPING モールやカラオケやらボーリング場なんかもできて、だいぶ栄えてきた印象だ。

といっても俺が向かっているのはそんな大きい SHOPPING モール

ではなくて、行きつけの小さな『スーパー南田』である。正直言つて奮発する機会などない一人暮らしの食材調達など、小さいスーパーで充分なのだ。

「・・・つしゃいませ」

店内に入ると買い物籠の整理をしているアルバイトのチャライお姉さんが、それはもう無気力極まりない態度で慣用句を読み上げる。前はもつと愛想の良いスーパーだったのだが、最近アルバイトに教育が行き届いてない気がする。

ショッピングモールに客を取られつつあつて店長ふて腐れてるのかな。

やる気のない店員に軽く一瞥くれてやって、俺は持ってきた買い物袋を広げて獲物の探索を始めた。

そう、これもいつもの変わらない日常。

精巧に作られたゼンマイは、一つの取っ掛けりもなく回り続ける。急に別の事をやれと言われて、直ぐに適応できるほど器用でもない。いまあるそれを楽しめばそれでいいのさ。

材料調達も完了して、俺はあまりに空きすぎているレジに今にも破裂しそうに膨れ上がった買い物袋を置いた。

「いらつしゃいませ」

やけに威勢のいい声。新しいバイトさんだろうか？

そう思つてふと好印象で元気なアルバイトさんの顔を見ると、

「・・・あ、あれ！？枝村？」

「・・・げっ、草野くんじゃあないかい・・・あは・・・

」

制服にエプロン姿で、悪戯がばれた子供のように口角をひくつかせる枝村がいた。

ていつかげってなんですか、げって。

・・・っとそっか、そういえばうちの学校はアルバイト禁止だった

な。アルバイト禁止なのに一人暮らししてる奴がいるってのも変な話だが。

勿論学校には内緒だけど。

「ちょ・・・ちよつと外で待っててくれい！ちようど今バイト・・・いやお、お手伝いが終わるのでせっかくだから一緒に帰ろうじゃないかつ！？というかもう正直に言おう！弁明させておくれい！」

えらい焦りようで胸の前ではたば手を振っている枝村。そんな姿はなるほど可愛いものであったが、何やら俺の中で悪戯心が働いてしまった。

「えゝどうすつかなゝ」

腕を組んで若干流し目をしながら嘲笑うように見せてみる。

「あゝ！そんな事いうゝ！んじゃ、この今日の夕飯らしき材料達はぼつしゅー！レジうつてあげないよっ！」

「ちょ！それだけは勘弁！」

いつの間にか攻守が交代していた。

外で待つこと5分。

一応ユニフォームである、ど太いマジックペンで『南田』と乱暴に書かれたエプロンを剥ぎ取った制服姿の枝村が、「うおーい」と手を振りながら走ってきた。

「そんな急がなくてもいいのに」

「いやいやゝ！人を待たせるとろくな事が起きないんだよっ！つてどつかのお偉方のヒゲのおじいさんが言ってたよ」

「どこのじいさんだよ」

枝村は徒歩で、俺は先程通ってきた隣町とを結ぶ林を越えたちよつと先にあるという枝村の家まで自転車をひいて行くことにした。

なんだろう・・・。

よくよく考えたら女の子と二人きりなんて初めてじゃないか。そう思い始めたらなんか異様に緊張してきたな。何か話題話題

「ねえつてば草野くん！」

「わあああ！なななんだ！？」

後頭部辺りを軽いチョップで小突く枝村。一人緊張していたせいか、何度も呼ばれていた事に気付かなかっただけらしい。

「どしたの？ボーツつとして？」

「いや、なんでも・・・」

どうやら気にしているのは俺だけのようで、様子がおかしい俺を枝村はきよとんと真ん丸で黒曜石のような瞳で眺めてくる。

「それよりさっきのバイトのことなんだけどさ・・・」

「あ、ああそれさっきも気になってただけどさ、学校終わってからまだ1時間くらいしか経ってないのにあがつちゃっていいのか？」
学校は10時頃に終わり、現在11時半ちよつと前。

1時間バイトなんて雇ってもらえるのだろうか？

「いいのいいの！ホントアルバイトっていうよりお手伝い感覚なのさ！店長が知り合いで、暇な時だけ来ていいよ」って言われてるから、まあちよつとしたお小遣稼ぎだよ！だから・・・、」

そう続けて枝村はぷるつと弾けるような唇の前で人差し指を立てた。

「これは草野くん・・・いや春樹くん・・・だっけ？と私だけの約束だぞっ！」

「なぜにいきなり名前呼びに？」

「ふっふっふ」。秘密を共有してしまっただけならもう私たちは友達同士も同然！私も春樹・・・いやハルくんと呼ぼう！だから私の事も葵って呼んでいいからね！」

へへつとはにかみ嬉しそうに持っている通学鞆を蹴飛ばす。木々の隙間から差し込む光も相俟って、彼女の笑顔は宝石のように輝いていた。そんなことを面と向かって言われるのは初めてで少し気恥ずかしい。

「おおつと！どうやらここでお別れなようだっ！そんじゃねハルくん！また明日ガッコで会おう！」

やいはい話を交わしているうちに、林を抜けて十字路に着く。島に

て遭難中の冒険家が、一隻の船を見つけて助けを求める時のように大きく手を振って見せる枝村だが、

「そうそうハルくんの秘密もちゃんと共有してるからねっ！」

一瞬何の事かわからなかったが、枝村はすぐに俺の買い物袋を指さした。

「その材料の量・・・一人暮らしたろう？いやっ！いいんだ！事情は言わないでくれい！私も詮索したりはしないよ！だって人には、」どこぞの演劇女優みたいに身振り手振りで感情を表現する枝村だったが、途中で言葉を切って、

「・・・それぞれ言えないものがあるものだから」

元氣印の彼女からは想像できないほど憂いのある表情を一瞬だけ見せたが、すぐに真っ白で綺麗に整った歯を見せて笑顔で手を振った。スカートを揺らし走り去って行く彼女を眺めながら、俺は一つ心残りを呟いた。

「・・・葵って呼べなかったなあ」

帰り道、行きは心地良い下り坂も帰りは地獄の上り坂に早変わり。

俺は錆だらけで漕ぐごとにギシギシと悲鳴をあげているマイバイシコーと共に、足に乳酸を溜めながら必死にしかちよつとずつ上がつて行く。自転車から降りて押して登ればいいと思われるかもしれないが、やってみるとわかるが疲れ具合はどっちも変わらない。

足か腕かの違いだ。

どうせ疲れるなら君も一緒に悲鳴をあげようじゃないか我が相棒チヤリくん。もし自転車が気持ちを表現できるなら、振り落とされてタイヤで頬を踏み潰されても文句はいえまい。もう30年後くらいには、坂道では歩道がエスカレーターになっていると嬉しいのだが。そんな馬鹿げた事を考えている頃に、ようやく坂道を登り終える。足もチヤリも悲鳴をあげている。

その時だった。

麓の方から聞こえ出す悲鳴にもとれる音。

俺のトラウマをえぐるベルと警報。

消防車だ。

2、3台の警告音が混ざり合って、事の重大さが知れる。

得体の知れない物が胸の中でざわつく。

二年前の走馬灯が頭の中を高速で駆け巡る。

『逃げて・・・春樹・・・早く・・・!!』

「この音・・・さつき枝村と分かれた近くじゃ・・・」

自分の心音が低音ドラムのように聞こえる。

肺を失ったのではないかと感じるほど呼吸が難しい。

坂を登りきった汗も今では冷え切って頬を伝う。

「・・・行かないや」

それでも俺の身体は勝手に自転車に跨がって、再び坂道を急降下している。

思う程大きな騒ぎではないのかも知れない。

知り合いが被害に遭うなど微生物ほどの確率である。

ただ火事に関しては、俺の中ではもう知り合いだろうがなかるうが

駆け付けなければ気が済まないものであった。

何より『あの時』と同じ、胸騒ぎが止まらなかった。

もうあの時と同じ過ちを繰り返しはしない。

俺はもう逃げない。

逃げたくない。

無我夢中でペダルを漕いで、警告音が鳴る方へ向かう。音との距離を詰めるごとに、だんだんと野次馬の声が聞こえてくる。更には周りの温度も上がっているように感じる。先程枝村と分かれた林前十字路に着き、音の鳴る方へ耳を澄ますと、どうやら枝村の家とは逆

方向らしい。

「とりあえずは良かった・・・」

一息ついて、ワイシャツの袖で吹き出す汗を拭う。だがふと上を見ると、ここからでも確認できるほどの黒煙があがっていて、事態の大きさを表している。

「あ、あの！すいません！この先で何か遭ったんですか！？」

黒煙がなびく方から走ってきた主婦らしきおばさんに声を掛ける。

「大火事よお！随分古いアパートで人もあまり住んでなかったらしいんだけど、最近この辺りで放火事件が多発してたからねえ・・・つてちよつと！危ないよそつちは！」

お礼を述べるのも忘れて、更に自転車走らせる。放火と聞いて苛立ちもある。しかしそんなことよりも人命救助が専決。

いや、漫画のように素人が水を被って業火に飛び込み、救出できるなぞ考えちゃいない。

それでも、ほんの些細な事でもいい。

俺にも何かできることはないか。

そう思いながら着いた現場では、既に火は弱っていて消火活動も終盤であった。多くの野次馬で消防士の姿を確認することができないが、掛け声だけは届いてくる。火は弱まってはいるが、人の多さもあってか熱気が凄まじい。

まるでサウナにいるようだ。

「すいません！中の人、助かったんですか！？」

再び人混みの中にいる人へ事情聴取。

「うーん、助かったんだけどね・・・。可哀相に、高校生くらいの女の子と妹らしき子たちはまだ小学生ぐらいだよ・・・。」

ほら見てみなつと前を開けてくれると、俺の目に飛び込んできた光景は、いくつかの頑丈な柱だけが煤けたまま立っているだけの跡形もないアパートの無惨な姿。

そして

身体中に灰を張り付け、同じく顔をくしゃくしゃにして大泣きしている小学生くらいの女の子二人を両脇に連れ、世界の終わりを知ってしまったかのように無気力で立ち尽くしている……、

碧原一葉、その人であった。

その姿は、さながら国を失った王女であるように、ただただ真っ直ぐ陥落した城を見つめていた。

第1章 (2)

黒煙と喧騒の狭間に立ち尽くす三つの影。

「碧……原……?」

消防士たちの制止する声も無視して、立ち尽くす彼女に俺は思わず声を掛けていた。名前を教え合ったわけでもないのに、何故知ってるんだと怪しまれるかもしれない。

しかしそんな事は杞憂に終わる。

彼女はこちらを向かずに、ただひたすら切なげに燃え尽きて廃れた柱を見つめながら、

「燃えちゃった……全部……なに
もかも……」

そう呟いた。

微かな風が彼女の長い髪を揺らす。俺の声にも存在にも気付いていないのかは知れなかったが、彼女は一粒の涙も見せていない。

『あの日』の残像が彼女と重なる。

そう……あの時あそこに立っていたのは俺だ。そして茫然自失の俺に手を差し延べてくれたのは大家のおばちゃんだった。

「大丈夫だよ……大丈夫……」

それはまるで天使のような笑顔で、傷心の俺を抱きしめておばちゃん俺をアパートに連れて帰って、温かいスープをくれた。あの時俺の心は、曇天にも似た黒い靄が身体の外に放出されていくような感覚を覚えたんだ。

だから俺は、知らず知らずのうちに彼女達の前に立ち、あの日のおばちゃんにあやかるように手を差し延べていた。

「……あ、あなた……」

やはり俺の存在には気付いていなかったようで、長い睫毛から覗く今にもこぼれ落ちそうな瞳がようやく俺の方へと照準を合わせた。

彼女の両脇に連れられている妹達も真っ赤で泣き腫らした瞳でこちらを見つめてくる。

何と声をかける？

俺はまだこんな時にとる行動をまだ経験値として獲得していない。何故なら俺はなんてことのない子供だからだ。

抱きしめて安心させる力も、気の利いた言葉で落ち着かせてあげることも、てんで自信なんてない。

というか抱きしめるのは流石に色々な面で無理がある。

それでも俺は言うしかないんだ。

「　　ウ、ウチくるか・・・？着替えるモンくらいならあるし・・・」

まだ太陽が赤くなるには早い頃、俺と碧原一葉とその妹二人は、我が根城であるボロアパートへと向かっていた。自転車なら20分くらいの距離であるが、四人乗りなど以つての外のため、歩いて倍の時間が掛かる。

道中、彼女達とは一言も口を利かなかった。何故ついて来てくれるのか、俺も自分で言うておいてなんだがさっぱりわからない。

そもそも俺は保護者になれる歳でもないし、碧原一葉に至っては同級生である。今更ながら非常識すぎるのではないか、両親だって心配してるだろう、そもそもほぼ初対面だし、などなきつい坂道を歩きながら頭を悩ませていた。

しかし、彼女達は俯きながらも俺の後ろをカルガモの子のようについて来てくれる。両脇の妹達ももう泣いてはいない。二人とも小学生くらいだと思われるが、この歳での火事被害はトラウマになりかねない。お前なんか何ができると言われればそれまでであるが、

せめて今日の事を忘れさせてあげるくらいお持て成ししてあげようと思う。

俺がそうされたように。

「ゴメン、えらい狭いとこだけど・・・」

部屋に着き、先ずは風呂に入れてやることにする。彼女達の身なりは黒ずんでいて、着ている衣服も所々煤けてボロボロだ。

「とりあえず俺のＴシャツとジャージ・・・妹さん達には結構でかいかもしれないけど、いいか？」

俺が問うと、彼女はコクリと首を縦に振り、俺から衣服を受け取ると妹達と共に風呂場へ消えていった。

一段落ついて、俺は畳に腰掛ける。そういえばずっと制服のままであったが、そんなのはもうどうでも良かった。

色々気になることがある。

彼女達の着ていた服装だ。

筑紫や佐久間の話からしても高貴な家柄であることは間違いないはずなんだが・・・。

彼女達は学校のジャージ姿だった。それに燃えてしまったというのもここ同様のボロアパートであり、彼女とは似ても似つかない。

まさか、ドが付くほどの貧乏だなんてことは・・・。

そんな有り得もしない想像をしていると、風呂場のほうから微かな笑い声が漏れてきた。そんな音に聞き耳を立てながら、俺はようやく安堵した。

自分同様の体験で悲しむ姿は誰であろうと見たくない。

火事の喪失感というものは、人には説明できないほど苦く切ないものなのだ。

しばらく茶菓子の用意などで動いた後、俺は制服を脱ぎ捨てて部屋着へと変身する。Ｔシャツにスウェットというなんともラフな格好である。

ちなみに着替え中に彼女達が風呂からあがってくるなんてお約束は

なかったので安心してくれ。女の子の風呂は長く、茶菓子用意や着替え程度の時間では帰って来なかった。三人であるから特に長く、もうかれこれ1時間半近く入っている。もう夕方だ。窓から差し込む紅い光は、座っている俺をスポットライトのように照らす。部屋に漏れ込むカラスの鳴き声が哀愁を漂わせ、今日の終わりを告げているようだ。

「あの・・・」

身体を窓に向けていた俺に、どこか遠慮を感じる声がかかる。振り向くと、風呂上がりで微かに湯気を漂わせ、水気を含んだ髪を妖艶に揺らしながら碧原一葉がこちらへやって来た。妹達も後から横断歩道を一列で渡る小学生のようについて来る。碧原は俺の少し大きい学校のジャージをだぶつかせ、ズボンの裾を引きずらせる。先程までの格好もジャージだったが、彼女の容姿には不相応の衣服である。それでも、水を滴らせ、近づくことに鼻をくすぐらせる石鹸の香りに思わず口をあぐりと開けてしまいそうだ。

いつも俺の使っているボディソープのはずなのに、妙に気になるのはなぜだろうな。

「二葉と三葉には大きすぎてズボンは無理だったから・・・」

二葉・三葉とは妹達のことだろう。碧原は先程渡した二着のズボンを返してきた。妹達は俺のプリントTシャツを着ているが、あまりに大きすぎて膝上まで伸びるワンピースのようになってしまっている。

「ああ、ごめん。必要なら買ってくるけど・・・」

「う、ううん！そこまでは大丈夫だから！」

慌てた仕種で胸の前でふるふると手をばたつかせる碧原。

「だいじょーぶです！ありがとーございますっ！」

そんな姉の様子を見て、少しふわふわとしたショートカットの方の妹が快活に答え、ぺこりと可愛いらしくお辞儀をしてくれる。

「ほらっ！ミツバもおれーいの！」

二葉と呼ばれる娘は舌足らずな口調で、頬を膨らませて若干紅潮させながら黙っていた長いポニーテールを右肩に掛けておさげのようになっているもう一人の妹の背中を押してお礼を促す。

「う……あ、ありがと……」

目元に下がる綺麗に切り揃えられた前髪の影響からつぶらな瞳が俺を見つめ、耳を澄まさないと言えないほどの声量で多少むくれながらもお礼を述べてくれた。

無気力な表情に定評のある俺の、世にも珍しい最大級の笑顔を返してあげると、またすぐにぷいっとそっぽを向いてしまう。

「ごめんね、ミツバはちよっと人見知りするから……」

「ぜんぜん。それより今更過ぎるけど、俺は草野春樹っていうんだ。」

「朝話はしたけど名前は言っただけだったわね。私は碧原一葉。こっちのショートカットが二葉小学六年生で、おさがが三葉、四年生。」

三人姉妹なの」

碧原が妹達の頭に優しく掌を乗せると、二人はくすぐったそうに眼を細める。

髪色も碧原、そして俺と同じように栗色だ。

顔も三姉妹そっくりで、なんといっても三人とも端正な顔のつくりである。

こんな反則的な三姉妹がいてもいいのだろうか。

「来ていいって言ってくれたけど、よく考えたら非常識だよ……」

。名前も知らなかった同級生の所に来るなんて……」

「き、気にすんなよ！もとはといえば俺が声掛けしたんだし！」

憂いを帯びた表情を浮かべる碧原に俺は慌てて返答する。

「うう、一番俺が逡巡していたことを……」

それにしても、だいぶ聞いていたイメージとは違う気がする。朝感じた人を寄せ付けない空気、御令嬢のような気品溢れる様子は今は消え去っている。

「ま、まあとりあえず座んなよ。ソファーとかないけど……」

俺は先程茶菓子を出したと同時に敷いた人数分の座布団を指す。

「う、うんありがと……。ソファーって？」

「えー？あ、いやこつちの話……」

うう、まさか御令嬢を座布団なんかに座らせるはめになるとは……。

和室の中心に置いてある木製正方形テーブルを挟んで、三人は俺の向かいへと腰掛ける。冬は火燵にもなる便利な物だ。それにしても何か妙に座布団が似合っているのは気のせいだろうか。

「わあおせんべー！」

二葉ちゃんがテーブルに身を乗り出して汚れのない瞳を輝かせながら、海苔付き煎餅をさっさと一枚取って頬張る。

「こおらフタバ！図々しいにもほどがあるでしょ！？」

「いーじゃん！せっかくハルキくんがだしてくれたんだもん！食べなきゃわるいじゃん！」

「だからっていきなりがつつくな！」

おやつの時間を守れなかった子供を叱り付けるように、碧原は二葉ちゃんの脳天にげんこつを落とす。

「いつつたあゝゝゝ！！ヒトハのばか！」

漫画ならこぶが盛り上がっているであろう箇所を押さえながら、涙目で姉を指差す。

「ふふ……。フタバは食いしん坊だから……」

お上品に口許を手で押さえながら嘲笑する三葉ちゃん。

「う、うるさい！ミツバもばか！ばかばか！」

「あにおー！？」

クールに見える三葉ちゃんがクールを何処かに置き忘れて立ち上がるのを皮切りに、ぽかぽかと殴り合い……。というか小突き合いが始まった。

「まったくもー、あいつらは……」

「はは、ちよつとでも元気になってくれて良かったよ」

呆れて嘆息する碧原の表情も、少し穏やかに戻った気がする。

「・・・草野くん」

「春樹でいいよ」

「ん、じゃあハルキ・・・くんは・・・、なんで私達を・・・？」

少し俯きながら上目遣いで碧原。

「・・・俺もさ、二年前に火事で母親亡くしててさ、それでほっとけなかったってというのが理由だよ」

「・・・え、じゃあ今は」

「一人暮らしだよ。親父は海外にいるし」

「・・・そっか。でも・・・学校での私の事、大体知ってるでしょ？何て言われてるか・・・とか」

さらに俯いて表情は見えなくなり、覗くのはぎゅっと下唇を噛み締める口元だけ。心なしに震えているように見える。

「まあ知らないって言ったら嘘になるかな」

今日の朝にその噂を聞いた疎い奴なんですが。

「・・・私もさ、ミツバとおんなじですんごい人見知りしちゃって、毎回クラスに馴染めなくてさ・・・。そのうちなかお金持ちだとかお高く止まってるとか有り得もしない噂が立っちゃって・・・。誤解も解けないまま私もそういう風に振る舞うしかなくて・・・。」

「・・・やっぱ御令嬢とかはうそっぱちか」

「・・・気づいてたの？」

そりゃあな。

ボロアパートが燃えるのを学校のジャージ姿で眺めている姿を目撃したら、疑念も働くというものだ。

「・・・よしわかった。そんな噂なくしてやろうぜ！」

俺は胸の前でガッツポーズを見せてやる。何故こんな気持ちになるのかは自分自身にもわからない。いつでも面倒ごとに係わり合うことに消極的なのに。

「・・・え？」

碧原はその言葉に助けを請うような表情で俺の方へと顔をあげる。

「せっかくクラスメイトになって、ひよんな事から俺とも話すようになっただろ？俺が頻繁におまえと話してればそんな噂はすぐ無くなるさ」

「そうかな・・・？うん・・・そ、そだね！じゃあこれから・・・よ、よろしくおねがいします・・・」

ぺこりとお辞儀をする碧原。顔をあげた時、彼女の表情はこれまでのどのシーンよりも輝く、向日葵もそっぽを向くほどの笑顔を向けてくれた。

あまりの眩しさと気恥ずかしさから、

「え、あ、こ、こちらこそよろしくおねがいします・・・」

何故か俺まで頭を下げてしまって、何やらお見合いのようになってしまった。折角の天使の微笑みから一瞬で眼を逸らしてしまった俺の間抜けさを誰が攻められよう。直射日光を鏡で反射させて目の前で当てられてる気分だ。

思わず眼も逸らしてしまう。

「まあそれはそれとて、住むとことかどうするんだ？」

俺の場合はおばちゃんが連れ帰ってくれて助かったが、普通住むところがなくならなっちまったらほんと困り果てることだろう。親戚に連絡したりなどしなければならならぬだろうし。

しかしもうかれこれ俺の家に来て2時間以上が経つ。それでも、彼女は親や親戚に連絡する様子がなく、俺の問いに躊躇っている。

「フタバもミツバもいるからすぐにでも決めたいんだけど・・・」
そういつて二人に目を向けると、今だ可愛いらしい罵声を浴びせあっている。

人のお家の事情を聞くなど野暮なことではない。それぞれ色々な境遇があるだろうし、出会ったばかりの俺が軽々しく聞いていい問題ではないのだ。

ただ俺には一つ考えがあった。

「ここに住むか？」

「そうす・・・・・・・・・・ってええ!？」

胡乱に肯定しかけて碧原は急に頬を真っ赤に染め、口を開けたり閉じたり異常なほどうろたえている。

「な・・・なんだ？嫌か？」

「嫌も何も!! 私たち・・・まだ高校生だし・・・・・・・・その・・・出会ったばかりで・・・・・・・・ど・・・同棲・・・・・・・・なんて・・・・・・・・」

「ちょ! アホか! 俺の部屋にじゃねえ!! このアパートでってことだ! ってか同棲で!」

なんて勘違いしやがる! そりゃちよつと言葉足らずではあったが、どえらい勘違いをする碧原もかなり抜けているのかも知れない。

俺の知人になる奴は本当みんなアホが多い。

「え? あ、このアパート?」

「そう、俺も火事で家失った時に、大家のおばちゃんが迎え入れてくれたんだ。頼み込めば必ず受け入れてくれるはずだ」

そうさ、おばちゃんに相談すれば万事解決。俺のお悩み解決板。

「よしじゃあ早速相談いってみつか!」

「え!?! 空気がない!?!」

もう太陽も仕事を終え、地平線の向こうへ帰宅の一途を辿っている頃。

俺と碧原三姉妹は、食欲をそそられる香りが漂っている一階大家のおばちゃん宅（一般入居者より少々間取りがでかい）へと足を運んでいた。玄関先での立ち話であるが、夕飯の香りが漏れ出ている。この匂いは肉じゃがだな。今日もおすそ分け貰えないかな・・・ってそうじゃなくて!

「事情はわかったけど・・・、もう入居者で一杯であげられる部屋がもうないんだあ・・・」

おばちゃんは心底残念そうに口を三角形にしている。

「そこをなんとかできないかな？・・・ああ、おばちゃんの部屋にとか・・・ってそか雄太もいるもんね・・・」

雄太（13）とはおばちゃんの一人息子である。近くの中学に通っているクソガキだ。まあそのうち会うこともあるだろう。会いたくないけど。

「うゝん、悪いんだけど、うちも雄太だけで精一杯だから・・・・
・そうだ!!」

頭の上で電球を光らせたように、おばちゃんは左の掌に右拳を落としてやる。それから人差し指をピンと一本立てて・・・、

「何かいい考えが!？」

「ハルちゃん家で一緒に住めばいいんだよ」

「ああなるほど!そりゃいい考・・・・・・・・ってまあああああ!？」

おばちゃんの語尾に音符マークが付くのではなからうかというほどに、呑気にのほほんとんでもない案を推奨してくる。

「ち、ちよつと、おばさん!それは流石に・・・・・・・」

とんでも発言に碧原も動揺を隠せていない。というか先程の自分の勘違いが現実になりそうになっているのだから当たり前か。

「大丈夫だよ」。ハルちゃんはしっかりしてるし、部屋の家賃とかはハルちゃんのところは免除にしてあるし、ちよつと狭いけど一応部屋割は二部屋になってるから」

しっかりしてるからってだけで高校生の男女を一つ屋根の下で住む事を認めてくれるほど社会は甘くないよ!おばちゃんの大丈夫発言とその笑顔は人を安心させる力を持っているのは確かであるが、今回ばかりは全く大丈夫な気がしない。

まあ使っていない部屋が一つあるのも確かだし、家賃とかも働くようになるまではと気を利かせてくれてるし、年頃の女の子と同

室だからって簡単に発情するようなザル理性な俺ではないー（はずだ。信じているぞ俺）。

「ナニナニ！？ハルキくんと一緒に暮らせるのー？やったー！」
大人の事情をわかっていない二葉ちゃんがウサギのように跳びはねながら万歳万歳。

「・・・うん・・・私もあそこは心地いい・・・」

三葉ちゃんも明後日の方向を向きながらボソリと言。

「ほらほらあゝ、妹さん達もこう言ってることだし。ね？」

シークリームのように甘いふわふわ笑顔でおばちゃん。ちょ、おばちゃん今日は天使というか悪魔の囁きに聞こえるんですけど！やばい、完全にペースを握られた！天使の皮を被った悪魔と無垢でまんまと悪魔に騙された天使の見習トリオには太刀打ちができません。残りは分別ある天使だが、

「あ・・・じゃあ次のトコが決まるまではお言葉に甘えて・・・。

よろしくね、ハルキくん」

・・・悪に堕ちた。

「隣の和室部屋が一つ余ってるから、三人はそっちが主の部屋な」
夕飯タイム。

毎度一人であった食事も今日は賑やかに四人だ。おすそ分けしてもらったいつもより多い肉じゃがを突き合いながら、今後についての話をする。

「ホントにごめんね、こんな強引に押しかけたみたいになっちゃて・・・」

フォークとナイフが似合うはずだった碧原が、箸と茶碗を持ちながらご飯に眼を落としながら呟く。

「おう、それだそれ！」

俺はここぞとばかりに、ご飯粒の付いた箸で碧原を指す。

「こうなっちまった事はもう気にしてない！だからもうお互い気を遣い合うのはやめよう。俺はお前らを家族だと認識する。だから苗字で呼んだりしないし、妹達にちゃん付けなんかもしない」

何故か立ち上がって演説する俺を下からぽかんと見上げる碧原三姉妹。

「だからお前らも素の自分でいろ！存分にくつろいで貰って構わないし、なんか生活上文句があつたら遠慮なく言ってくれ。俺の事はなんて呼んでもいい。・・・これがこれからウチで暮らす上で今の瞬間作られたルールだ。・・・いいか？」

同じ家で暮らす上で気を遣うほど疲れるものはないと思う。共同生活するというなら、それぐらいのフランクさがないとやっていけない。

三人は眼を点にしながら、しばし固まった後、

「・・・　つぶ・・・、あはははは！」

一斉に堪えられなくなったように笑い転げた。

「あれ！？お、おい・・・だ、大丈夫か？変なこと言ったか、俺？」
何か急に恥ずかしくなってきた。ていうか飯中立ち上がってまで言う事じゃなかった？

うわ、もしかしてクサイ？

クサすぎる発言だった？

そんなことを頭を抱えながら苦悩していると、笑い転げる三人からすぐに一人が回復。

身体を起こしてから、

「あはは・・・わかつたよハルキ」

涙目の眼を擦りながらはにかむ一葉の表情は、一点の曇りも靄もない澄み渡る青空のようだった。

こうして、俺と碧原三姉妹の奇妙な共同生活が始まった。

第1章

完

第2章 (1)

「ホットドックだあ!!」

翌日、いつも通り無気力な朝を迎え、毎度お馴染み朝の身支度が始まるわけだが、本日から一味違う。地球の公転周期のように変わらなかった日常を崩す、いわば閏年のような存在が、俺の日常に追加されたからだ。細長いパンを真ん中で谷を作ってあげて、キャベツや玉ねぎやらを敷いてウインナーを乗っただけの、時間のない朝の心強いメニューを四人分の皿に盛り合わせていると、朝もはよから快活な声でメニューの名を叫ぶ娘がやってきた。

「へえー！食べたことないよ！早く食べたい！」

様々な方向からまじまじとホットドックを眺めているのは、碧原家次女二葉、小学6年生。

寝癖であちこち跳ねた栗色ショートカットを揺らし、好奇心旺盛の輝く無垢な瞳は一片の曇りも見当たらない。俺の貸したTシャツが大きすぎて、ほとんどワンピースのように着こなしてる。

「というかホットドック食ったことないって、今まで何食ってきたんだ？」

「こーらフタバ！いただきますしてからでしょ！」

既に我慢しきれず、二葉がホットドックを小さな口に運ぼうとしているのを目撃したのは、碧原家長女一葉、俺の同級生。

一つの枝毛も見当たらないような腰辺りまで流れる栗色の髪の毛。二重によってはつきり主張をするくりつとした眼。綺麗な放物線を描く整った鼻に自然な口角のあがりさらに美しさを増させる。決して細面とは言えない輪郭は、幼さも垣間見せて、まるで西洋人形を連想させる、完璧な美人だ。

しかし今の服装とはいえば、俺が貸してあげている飾り気皆無の学校の赤ジャージ上下。学校ではすっかり令嬢・高飛車キャラが成り立ってしまっているが、学校のやつらが見たらどう思っただろうな。

「朝からヒトハうるさいー！いいじゃんハルキが作ってくれたんだから！」

「だからこそこのいただきますでしょー！ごめんねハルキ、せっかく昨日分担当作ったのに・・・」

そう、昨日作った生活分担当によれば今日の朝飯は一葉＋妹達のはずだったのだが、いざ起きてみると誰もおらず、結局俺が急いで仕度するはめになったのだ。

「朝弱いと言えよ・・・。ってか時間ないからはよ食え」

目に見えるほど口を尖らして落ち込む一葉に、時計を指しながら促す。

「・・・・・・はよ・・・」

目をこしこし夢うつつな表情で、全員の耳に届くぎりぎりの声量であいさつをしながら座布団に正座してきたのは、碧原家三女三葉、小学四年生。

天真爛漫な二葉とは逆に大人びた印象。四年生にして既に人生を悟ったような、クールであり感情を表に出さない奴だ。いつもは栗色の長い髪をポニーテールに束ねて右肩おさげにしているが、今は寝起きで一葉とほぼ同じ髪型。

妹達も一葉同様、端正な顔立ちをしていて、三人が食卓に並ぶとお人形とおままごと遊びをしている感覚に陥る。

三葉は普段の眠そうな眼をさらに細めて、ホットドック一点を見つめながら固まっている。

「おうミツバ、よく寝れたか？」

聞いているのか怪しかったが、俺が問うと5秒くらいの間の後、ひとつゆつくりと頷いた。

「へへーミツバは寝言でよくソフトクリームおいひーって叫んでるんだよー」

「言っていないし何適当言ってた！アホフタバ！」

二葉が茶々を入れるのを皮切りに三葉がチョップを食らわす。

「イデーー！」

大人びていると言ったが、まだまだ年相応の可愛いらしさも残している。

「っし！みんな揃ったし、食うか！」

『いただきまーす！』

火事によって家を失った碧原三姉妹。

まさか一緒に住むなんてことになる夢にも思わなかったが、一先ず新たな生活がスタートしたようだ。変わるわけがないと思っていたし、変わってほしくないと思っていた日常。こうも簡単に変わってしまったとは、人生つてもんはつくづく行き当たりばったりだ。

ただこういう変わり方なら悪くない。

賑やかな生活、賑やかな食卓。

今まで俺の人生に足りなかったものが与えられたことに、気がつく
と俺はそんな変化をとて嬉しいと感じていたのだ。

「あれ？フタバとミツバは学校まだないのか？」

今だ呑気に朝のアニメを見ている二人を見て、結局朝は洗い物をすることになった一葉に問う。

「二人は来週からなの。でもよかった、Ｔシャツだけでなんて学校行かせられないよ」

「そりゃそうだ」

洗い物中の一葉の横顔が悪戯小僧のように笑うのが見える。

なんでこれで人見知りなんだ・・・。

普通に俺とも話してはいるし、今のも自然で可愛い笑顔なんだけどな。

「・・・？どしたのハルキ？私の顔に何かついてる？」

「おわ！え・・・いや・・・」

いつの間にか洗い物が終わっていたようで、ボーツと見ていたのがばれたらしい。

一葉は不思議なものを見るような様子で、きょとんと首を傾げている。

「……………ハナ、泡ツイてるぞ」

「えーウソ!?」

素早く鼻を隠すように手で覆って、どこどこと慌てふためく一葉。

「ウソだよ」

「ええ!? も、もう!」

俺の機転の効いた言い訳は見事に成功したわけだが、一葉からプロレスラーも顔負けのチョップをお見舞いされたのには驚いた。意外と乱暴な奴である。

かなり痛いし。

ていうかこの三姉妹はチョップが好きだな。

俺が制服に着替える頃、ようやく一つ重要な問題に気がついた。

よくよく考えれば一葉の制服がない。というか大体の物は灰と化してしまったわけで、教科書も学校鞆なんかもありゃしない。

「ヒトハどうする? 今日休むか?」

いくらなんでもジャージで登校は酷すぎる。昨日すぐ洗濯して乾かしたが、所々煤けて黒ずんでいるし。

しかし一葉は、

「行くよ。授業も遅れちゃうし……折角新しいクラスなんだもん。今度こそは溶け込みたいよ……!」

と大きな使命に燃える表情で、下唇を噛む。

「それに……」

二の句を告げる前に俺の方へ顔を向けると、上目遣いで朝日にも勝る笑顔をくれて、

「ハルキもいるし……ね?」

そう言葉を繋いだ。人に必要とされることが言い表せない程嬉しいものだとは思わなかったから、つい俺は恥ずかしくなってそっぽを向く。

「お・・・おお、まあなんかあったら言えよ・・・」

「うん！」

一葉なら大丈夫さ。

その明るさなら誤解だって解けるし、友達だってすぐに沢山できるようになる。そのためのお手伝いなら、喜んで引き受けてやるさ。

「あらあら、ハルちゃんヒトハちゃんおはよ〜」

古めかしい錆がかった鉄製ボ口階段を二人で下りて行くと、俺達と一緒に住まわせるという奇天烈妙案を提案した大家のおばちゃんが、いつもの通りアパート前を竹箒で掃いている。

「おはよおばちゃん」

「おはようございます！」

一葉が深々と挨拶すると、あらあらなどと言いながらおばちゃんもすかさず直角お辞儀。いつもフランクな挨拶しか交わしてなかったもんだから、かなり新鮮である。

「フタバちゃんとミツバちゃんは？」

頭上にクエスチョンマークを出すように首を傾げるおばちゃん。

「小学校は来週からなんだと」

「そうなんだあ。じゃあお留守番なんだね〜」

泡のように笑顔が弾けて、そのままいつも通りに柔らかないつてらっしゃいをプレゼントしてくれるおばちゃん。俺と一葉も釣られて浮かぶ笑顔で手を振り、その場を離れた。

状況が変わろうがやることはさほど変わりやしない。

そう簡単に日常が180度入れ代わるなんてことはないさ。

ただ、問題はここからだ。

だいたいこの時間に家を出ると、必ず登校中出会う奴がいるのだ。

一葉には言っていない。

一葉の人見知りとやらを治せるかもしれないからだ。それにあいつらなら誤解もすぐに解けるだろうし、少し・・・というかななりアホだが気のいい奴らだ。

この作戦は上手くいくはず。

下りの急勾配を木々の隙間から覗く朝日に眼を眩ませながら歩いていく。いつもは一人のこのゾーンも、二人で歩くと何やら新鮮な雰囲気である。これで平坦道だったら、いい散歩コースなんだけどなそんな事を考えながら、ただひたすらにお互い無言で歩いていると、道路を焦がす音が聞こえてくる。

この音はスケボーだな。

そんな音がだんだんと近づいてくる頃、俺が振り向くと予想通り筑紫正志が颯爽と愛機で滑ってくるのが見える。ただ遠目に見ると、何やら顔が強張っていて、いつもならもうスピードを落としていてもいい距離なのだが、筑紫は一向にスピードを落とす気配はない。考えるのもつかの間、挨拶も交わさず猛スピードで俺達をかわして去っていつてしまった。

「あ、おい筑紫！・・・なんだあいつ・・・・・・？」

「友達？」

「ん、おお、そうなんだけど・・・」

一葉も不思議そうに、高速で下って行く筑紫の後ろ姿を眺めている。気付かないなんて事はないと思うんだが、一葉と一緒に他の奴だと勘違いしたのか？

といつても栗毛なやつなんて他に知らないんだがな。

しばし豪快なシカトを決め込んでくれた友人の後ろ姿を眺めて、仕方がないので再び歩きだす。もう少し下ると平面道路となり、交差点へと差し掛かる。そこではもう一人腐れ縁のイケメンがいるはずだ。

・・・まあ、本当は会わせたくないんだが、一葉の人見知りを治してやるためだ。

妥協してやることにする。

「あれ？さっきのスケボーの人じゃない？」

まもなく坂道も終わりに差し掛かる折、一葉が前方を示す。見れば

筑紫と例のイケメン佐久間恵介が、何やらこそそこそここちらを見ながら話し合いを繰り広げている。

「おい、筑紫（佐久間）」

俺は何の気無しに一葉を伴って声を掛けると、筑紫が俺に任せておけと言わんばかりに佐久間を制して、俺達の元にゆらりと近づいてくる。その表情は深刻そうなので、驚きも滲み出ているような複雑そうな面持ちだ。

「ハルっちゃん・・・」

頭を俯かせながら仁王立ちし俺達の前に立つ筑紫は、よく見れば肩を震わせている。そして顔を上げ、眼を見開き光線でも出しそうな眼光で俺達を順に見ると、

「逆タマかコノヤロー!!」

と周りも気にせず咆哮した。

筑紫のアホ発言で人の多い交差点での視線は俺達の独り占めである。っていうか対面早々何口走ってやがるんだこいつは。

「ハルっちゃん!! そりゃ確かに昨日ちょっとお話して顔見知り程度にはなったけど! その次の日朝帰りしてくるようなナンパな奴に育てた覚えはないぞよ!」

お前に育てられた覚えもないけどな。

というか見た目だけならお前のほうがよっぽど軟派っぽいぞ。それよりも、もしかして俺達って傍目そんな風に見えるの!?

「ば、ばか違うよ、ヒト・・・じゃなくて碧原はな・・・」

「そ、そう! そこではったり草野くんと会ってね! そうそう偶然! だから今日は悪いけど草野くんは私と登校するから!」

「あ、っと、お、おいヒトハ!」

俺が事情を説明する前に、一葉は何やら頬を真っ赤に染め、大変慌てた様子で俺の袖を掴んでその場を去ろうとする。ぐいぐいと引っ張られ、先程の一葉の大声に驚き、面喰らって呆然と立ち尽くす筑紫を後方に眺め、その先でも口を開けイケメンが台なしの表情でほうけている佐久間の横を掠め、引きずられながら俺は助けを請うよ

うにもう一方の手を二人の後ろ姿に差し向ける。
だが二人は見えていないのか気づいていないのか、ただ先程俺達がい
た場所を見つめているだけのようだった。

二人が見えなくなる頃に、ようやく引つ張る一葉の手は離れた。

「ど、どうしたんだよ急に・・・？」

「重大な事忘れてたわ」

「重大な事？」

俺がオウム返しに返答すると、一葉はこくりと一つ頷き、何やら再
び頬を染めて視線を外す。

「わ、私たちが一緒に住んでるってこと・・・、内緒にしていたほ
うがいいんじゃないかな・・・」

「え？なんで？」

「だ、だつて！普通に考えて一緒に住んでるとかおかしいじゃん！
べ、別に付き合つてるとか・・・そんなじゃないんだし・・・。
・。っていうか噂広まったら先生とかにもバレるかもしれないし！」

一葉の言う事は一理あるな。こんな事が知られたら世間的にあまり
いい印象はないよな。俺らまだ高校生だし、何より一葉が生活する
場所を失うのは困る。

二葉や三葉はまだ小学生なんだ。

大変な思ひはさせたくない。

「そうだな。とりあえずは内緒にしよう。俺とヒトハは今日の朝
バッタリ会つて、家が近い事を知つて、気を許す友人となった。い
いか？」

俺が提案すると一葉は潜入捜査の作戦を聞かされる部下のように頷
いた。

「あと、もう面倒だから言うけど、まずはさっきのあいつらと友人
になつてもらつぞ」

「え・・・できる・・・かな・・・？」

「大丈夫、奴らは今後クラスの中心になりうる素質を持った二人だ。

そんな二人と気軽に話すヒトハの姿を見た他の連中はどう思う？」

「・・・どうなるの？」

「ああ、もしかして碧原さんって実は愛想が良くって話しやすい人だったのねっ！キラキラ・・・ということになるはずだ」

「そっか！じゃあガンバル！」

単純に納得して、胸元で小さくガッツポーズを作って奮起する一葉。俺の渾身のギャグ混じり女子物真似を華麗にスルーしてくれるとは・・・。

まあ俺だってそんなに社交的ってほどでもないんだが、先程の様子を見ていると極度の人見知りらしかったな。筑紫に言い訳してるときも顔真っ赤だったし。

俺と初めて会った時はそうでもなかったんだけどな。

まあそれどころじゃなかったたてのもあるけど。

「うげ・・・！」

「ん？」

そろそろ学校が見えてくる頃、一葉は一瞬蛙の声と聞き間違っほどの声を出して、動かしていた足を止める。一葉が見つめている先に俺も視線を移すと、一葉よりさらに一回り小さいうちの学校の制服を着た女の子二人組がスカートの前で手を組んで佇んでいる。

「「お嬢様、おはようございます！」」

一系乱れぬ動作で綺麗なお辞儀をして、二人は微笑を浮かべながら俺達の元へ滑るようなステップで近づいてきた。

よく見れば二人は同じ顔。要するに双子だ。襟足を短く切り揃えたボブカットで、ほんのり染められる頬は西洋風な一葉とは逆の、ひな人形のようなイメージだ。そんな二人の行動は、まるで二人の間に鏡が隔てられているように、先程から全てが真逆である。

「もう！撤収撤収！見てわからない！？友人と登校中よ！」

だんだんこちらの方が違和感が出てきたお嬢様口調で一葉はシッシと追い払いにかかる。

「「これはお嬢様！？何故ジャージでご登校を？」」

「き、気分よ！いろいろあるの！いいから今日行つた行つた！」
一葉の素っ気ない態度に二人は大層堪えたのか、目に見えて肩を落
としながらその場を去っていく。

まるで敗残兵のようだ。折れた刀が錯覚で見えるぞ。

「・・・あの二人は？」

聞かなくても大体察してはいるが、一葉が頬を膨らませ話したそう
にこちらを見ているので聞いてやることにする。

「あの二人から始まったの・・・私がお嬢様だかなんだなんてい
う噂は」

「そりやまたどうして・・・」

「この学校に入学した初日に、いきなり大声でお嬢様～！なんて擦
り寄ってきて・・・。あとはこの通り・・・」
なるほどね。

付き纏われて勝手に周りが勘違いってことか。にしても一葉のお嬢
様オーラは相当の物だな。誰が見ても美人であるし、高嶺の花的な
もんが人が近づくのを邪魔させてるんだろう。

「あの娘達、別に悪い娘ってわけじゃないの・・・。ただなんか憧
れだとか、勝手になんか勘違いしてて・・・、それでなんか夢壊す
のも・・・と思って・・・それで・・・」

「お嬢様に成り切ってたら、いつの間にかクラスでも避けられてた・
・・・か」

「は、はつきり言うな！」

膨らませてた頬にさらに空気を溜めて俺の脳天にチヨップ二回。

地味に痛いからやめてくれ。

それにしても人見知りにお人よしも相俟って、誤解も解けずに明け
暮れてたわけか。

でもなんだろうな。何か引つ掛かってるんだが、一葉の誤解がすぐ
にでも解けてもおかしくなかった一つのピースがある筈なんだが・
・。ぐるぐると頭の中で巡る記憶を辿りながら思案するが、俺のし
よばい脳みそはなんの答えも出してはくれず、あえなく検索を終了

した。

「そついやあ先生には制服のことなんて言うんだ？」

「ん？そうね・・・火事の事言々と新しい住所とか聞かれるし、まあなんか適当に話つけるよ」

「そつか」

「ヒットハー！」

学校へと到着し、ガヤガヤと騒がしい昇降口で周りを凌駕する声量でやってきたのは、先日スーパー南田でバタリと会い、一応？友達ということになった今年からのクラスメート枝村葵である。

「アオイ〜！」

猛スピードでやってきた彼女は突進するように一葉に抱き着く。エ ندا〜 と聞こえてきそうな程の熱い抱擁だ。犬の頭を撫でるブリーダーのように、一葉の頭をわさわさ撫で回している。

「も〜ヒト八なんで昨日ガツコこないんだよ〜！初日は一番大事だつて言つたろう！」

「だつてだつて〜・・・」

「あたしの素晴らしいスピーチも聞き逃すし、チミは今回こそは誤解を解くという気がないのかね？」

「あるよ〜・・・でもハルキが助けてくれるっていうし・・・」
一葉から俺の名前が発せられると、たつた今気づいたかのようにこちらに振り向く枝村。

「ハルくん！おはよ〜！」

にこりとハイビスカスのような笑顔。

「お、おお、おはよう枝・・・じゃなくてアオイ」

そついやあ名前で呼べって言われてたな。

「早速ヒト八と仲良くなつたんだね？」

「ああ、まあ色々あつてな」

「あ、あれ？二人はもう顔見知りなの？」

一葉が不思議そうに双方に目線を移らせながら眼をぱちくりさせる。
「顔見知りどころかあたしたちはヒミツを共有しあうトモダチなのさっ！」

「ヒ、ヒミツ？」

「それはヒト八にも教えらんないなあ。ヒト八にも言つた事ないヒミツだもんっ！」

ふふんと鼻高々に腰に手を当て反り返る葵。

その様子を見た一葉は少しムツとして、

「わ、私だつてハルキとヒミツ共有してるよ！ア、アオイには言つてあげないもんね！」

と、玩具を独り占めしたい子供のように対抗する。親友に隠し事されるのがそんなに気に入らないのか。

「なにおー！」

再び一葉の頭を抱きしめて片方の手でポカポカと小突いている葵。

しかし二人の共に悪戯な笑みを浮かべているところを見ると、これが二人の在り方なのではないのだろうか。そんな様子を見て先程暗闇に消え去ったピースが再びゆらゆら現れ、かちりと嵌まった。

そうだ、何故こんなにも明るくて人懐っこいムードメーカーな葵がいて、一葉の誤解が解けなかったんだろう。葵と一緒に避けられるどころか人気者間違いないだと思ふのだが。

「アオイ・・・、ヒト八がみんなにあらぬ誤解をされてるの知ってたんだろ？」

「え？うん・・・」

一葉の柔らかそうな髪をぐしゃぐしゃにしていた手を止め、葵は申し訳なさそうにこちらを覗く。

「なんでもっと早く誤解を解いてやろうとしないんだよ？ヒト八が

それで悩んでたの、親友ならわかってたはずだろ！」

思わず語気が荒くなるのがわかる。登校時間帯のため、昇降口の視線は独り占めだ。

「……………」

俺の批判の言葉に葵は俯いてしまう。折角できた新しい友達に朝もはよから注目を集めての怒声。もはや救いようのない俺である。しかし学校でも一人で、火事にも見舞われて、こんなにも不幸の一途を辿る一葉を俺はどうしても放っておけなくなっていた。

こりやもう葵には話かけてもらえないかもな。

「だってあたしも友達いなかったもん。ヒトハ以外に」

「そんな理由になるか！……………って、へ？」

葵の言葉の意味を瞬時に理解できなかった俺は、思わず勢いで文句を垂れてしまったが、葵に友達がいない？

一体何の冗談だ？

しかしどうやら冗談ではないらしく、その表情は俺が思い描いていた葵へのイメージとは掛け離れたもので、明るさの発電源はどこへやら、憂いを帯びた淋しく切ない表情で眼を逸らしていた。

「う……………嘘だろ？だって、俺とは普通に話してだし自己紹介だって……………あんなに楽しそうにしてたじゃんか……………」

「へへー、あんなの狂言さっ！ホントは新学期デヴィューしようとしてたのはあたしだ……………なんてね、へへ……………」

最後は感情を吐き捨てるように言葉を紡いだ葵は、既に落としていた上履きを履いて足早にその場を去った。

「ア、アオイ！な、なんで……………」

「……………アオイが避けられ始めたのもたぶん私のせい……………私が避けられ始めた頃も、アオイは変わらず私に接してくれたから……………」

「……………俺、あいつにひどい事を……………」

事情も知らずに責めてしまったことへの後悔と同時に、ふつぶつと

心の奥底から怒の概念が湧きだしてくる。

「ハルキ、アオイは見た目ほど強くない。強くないよ」

そんなのもうわかってるよ。

もう俺のすべき事は決まった。

面倒臭がりの俺だが、見て見ぬ振りするほど落ちぶれちゃいないさ。

第2章 (2)

朝のホームルームも岩崎教諭の快活な声で締め括られて、5分後から始まる今年最初の授業の用意を各々始める。早速の1限は物理で移動教室のため、すぐにでも新たなクラスメートとお話に花を咲かせたい生徒にとってはとんだ誤算である。

「おいハルっちゃん！次移動教室だろ？行こうぜ行こうぜ」

俺が机の中の教科書を漁っていると、筑紫が紫のマフラーと身体を揺らしながら佐久間も伴ってこちらへ片手をあげながらやってきた。そのマフラー先生に注意されんのか？

「二人とも悪いな。先約が入ってるんだ」

「先約？」

筑紫は黒縁メガネの奥で眼を見開かせる。

なんだそのお前に他に友達いたっけ？みたいな眼は。

「ハルキ早いな。もう新しい友達できたのか！」

佐久間が清涼飲料水のような笑顔で大層嬉しそうにしきりに頷く。

いちいち人の行動に喜びを感じる奴である。まあ嫌ではないけどな。

「なんだよハルっちゃん！水臭いな」。俺達にも紹介してくれよ

」

筑紫は猫撫で声で気色悪くブレザーの袖を引っ張ってくる。

「おうそのつもりだ。だがこの移動教室だけはちょっと待ってくれ」

「なんでよ？」

「見せ付ける必要があるからだ」

筑紫が再び疑問詞を口に出す前に、俺は席を立てて行動に移す。幸いまだ半数以上のクラスメートがこの教室にいる今が絶好のチャンスだ。俺は教室最後尾の席から、先頭に座る一人の女子と側にいるもう一人の女子の背中に向かってこう叫んでやった。

「ヒトハ！アオイ！次物理だよな！一緒にこうぜ！」

気だるさNo.1を決める大会があれば準決勝までは残る自信があ

る俺の精一杯の明るさで、教室中に響く声で言ってやった。まだ教室全体がお互いを様子見している状態だったため、さほど騒がしいほどではなかった教室の空気はさらに冷却し凍結した。しかも俺が話しかけたのは学校でも随一のお金持ちと噂の一葉とそのお親友葵だ。しかも軽々しく呼び捨てである。江戸時代なら無礼者！と斬られても文句は言えないだろう。

一瞬の無音が響く。

笑顔状態の俺がそのままの笑顔でちらりちらりと周りを見渡すと、教室のクラスメート達は案の定呆気にと取られていて、後ろでは筑紫と佐久間も大口開けて間抜け面。俺の声と同時に振り向いた一葉と葵もUFOでも見たかという表情でこちらを凝視している。なんだこの文化祭で一生懸命みんなで力を合わせて作った出し物を壊しちゃった時のようなやつちまった感は。

というか一葉も葵もボーツとしてないでフォローしてくれよ！

恥ずかしさと気まずさで俺のハートは口から大脱走を敢行してしまいたいそうだと。

「い、いいよハルキ！アオイも行くでしょ！？」

「・・・へ？・・・あ、う、うんっ！行く行く〜！」

一時は何事かと呆けていた二人であつたが、俺の意図を察したのか大根役者よろしく乗ってくれた。二人の了承を得たのを機に、俺は二人を連れだつてそそくさと教室の外へ出る。それと同時に教室内がざわついたのがわかったが、今はそんなことはどうでもよかった。

「ぶはあああ！息するのも忘れてたぜ〜！」

「・・・ハルくん？なんで私たちを？」

胸の前で教科書を抱えながら、後ろをついて来る葵が申し訳なさそうに問い掛けてくる。

「・・・心配すんな、おまえらの新学期デヴィューは必ず成功させてやつから」

「ハルキ・・・」

「い、言っとくけど、俺の大声はレアだからな。耳に焼き付けとけ」

もうあと五年はないというくらい目立った瞬間だったな。大多数の前で大声張るなんて金輪際したくないね。でもこうすることくらいしか、俺なんかにはできないんだからさ。自分ができることをやりやいい。

「・・・・・・くく・・・・あつはははは！」

発電所は再び復活したのか、葵は溜まり溜まったパワーを吐き出すように吹き出した。

「ふふ・・・・流石あたしのトモダチだねっ！」

「そりやどうも」

どうやら一世一代の大勝負は成功したらしかった。

とんで物理の授業。

初っ端から実験をするという暴挙に出た禿げた物理教師は、三人組を作って勝手に始めといてなどと教師にあるまじき適当さで何やら自分の作業に没頭している。

「ようしっ、ハルっちゃん説明してもらおうじゃん」

「え？俺が物理苦手なの知ってるだろう」

「ああ、そっか！忘れてたわ・・・・って、その説明じゃない！？」
息巻く筑紫は何とかナトリウムだかの何とかを手に突っ込みを入れてくる。

「じゃあなんだよ？」

「なんでチミは新学期開始早々からべっぴんさん二人侍らせているのかい！」

言い回しが昭和だし、侍らせた覚えもないし。

「まあ、何事にも関わりたがらないハルキが二人の女子を連れだつて移動教室だもんなあ」

考える人みたいに見せながら冷静に解説する佐久間。

ていうかお前ら俺の事一体どう思ってるんだよ。

「まあ昨日一日で色々あったんだよ」

「だからその色々ってなんだよ！」

アルコールランプ持つてる手の指で犯人はお前だ！みたいに俺を指すな。

仕方ない、アホなこいつらにも理解しやすいよう説明してやることにしよう。

「・・・例えばだ。オセロで俺の白駒がほとんど相手の黒駒で埋められてるとする。ただし逆転可能の四隅は開いてたんだ」

「なんだその解り難そうな例えは？」

「いいから聞け。そこでなんと何の因果か知らんが、俺の白駒が四隅全部に置かれたんだ。しかも順番無視で」

「ほうほう」

「するとどうだろう？盤面の黒優勢の筈だった状況が全て白駒にひっくり返った！大逆転勝利！やったね！・・・これが昨日一日を表す最もわかりやすい例えだな」

筑紫は少し思案するようにオシヤレ気取りな黒縁眼鏡をあげてから、佐久間顔負けな涼しい笑顔を浮かべた。

「なるほど、全くわからん！」

「これ以上簡潔に説明することはできん！」

「まったく簡潔じゃねえじゃねえか！うやむやにしようつたってそうはいかんぞ！」

わあわあと筑紫と言い争っていると、佐久間はしたり顔で口を開く。

「・・・それって、ハルキにとっては喜ぶべき出来事だった・・・ってことだよな？」

たったの一日で、日常の平和で平凡な生活が一変した。変わらなくていいと思っていた普通の暮らしにメスを入れたような出来事に、俺はどう思ってる？

「・・・どうだろうね」

直ぐに答えを見いだせなかった俺は、少し苦笑いして答えてやった。佐久間は俺の答えに満足しなかったのか、二の句を告げようと息を吸い込んだ所で授業終了のチャイムが鳴り響いた。

少し開いて昼休みの事である。

俺は筑紫と佐久間と弁当を連れだって、一葉の席へと向かう。勿論目的は一つ、こいつらと仲良くなってもらって、クラスに一刻も早く馴染んで貰おうという魂胆だ。食卓・・・とは違うが、皆で飯をつつきあえばどうあっても仲良くならざるを得ないだろう。

いわゆる完璧なプランってやつだな。

「ヒトハ、飯一緒食おうぜ」

「あ、うんいいよ！」

俺が声を掛けた途端、振り向きざま大層嬉しそうに笑顔をくれる一葉。

よほど誰かと飯食えるのが嬉しいのかな。

「こいつらも一緒にいいだろ？」

「どもども！筑紫正志です！」

「佐久間恵介だ。ハルキの友達なんだけど、一緒にいいかな？」

相変わらずアホさを醸し出している筑紫と、落ち着いた笑顔で王子チックに問い掛ける佐久間。

「え！・・・あ、は、はひ！ダイジョーブデス・・・」

手元でスカートを握ってずっと俯き、声を裏返させながら答える一葉。顔がトマトのように真っ赤であることは、流れるようなサイドの髪で隠れてはいるが、大体想像がつく。

本当に大丈夫かな。

というかまさか佐久間に顔を赤らめたわけではあるまいな？

「おおよ？ごはんだべるのかい？あたしたちも一緒にしてよろしいかなっ？」

ふと後ろから声がすると、いつもの快活な様子で葵がやってきた。

しかし葵の隣に眼を移すと、もうひとり女子を連れだっていた。

「・・・・・・・・」

葵に無理矢理引っ張られた形で目線だけくれたその娘は、綺麗に切り揃えられた前髪、胸の辺りに下がる髪はウェーブしてふわふわとした印象。しかし細い眉は鋭くボーイツシュで、切れ長でありなが

らくりつと大きい眼に奥二重が特徴的。不機嫌そうな少し尖った唇も相俟って、少年のような印象も受ける。

可愛いと捉えるよりも格好よい美人と言ったほうがいいだろう。

彼女は目に見える程度に頭を下げて、すぐにそっぽを向いてしまった。

「さっきの物理の授業で一緒になってさっ！一緒にいいでしょ？」

後ろに隠れるように立っていたその娘を、紹介するように背中を押して前に出す葵。ほらほらと肘で発言を促す葵に、少し疎ましい表情を返しながらも、彼女はようやく口を開いてくれた。

「・・・花咲嘉穂」

ぶっきらぼうに答えてその場を離れると、仕方なさそうに自分の席の椅子を寄せて一葉の前に腰掛ける花咲。

「よおーし！俺も椅子もってこよー！」

花咲が座るのを皮切りに筑紫も動き出すと、残りのメンバーもつられるように一葉の席へと椅子を運ぶ。流石に六人となると一つの机では狭いため、隣の葵の席もくつつけて食べることになった。

おお、なんとというか普通に一葉人気者みたいじゃなか。

いい傾向だな。

「あれ？ハルキ今日コンビ二飯か。珍しいな？」

佐久間は俺が鞆から出したコンビ二袋を見て不思議そうな眼を向ける。それもそのはず、学校始まって以来昼飯をコンビ二で買うなんて今までなかったからな。しかし必ず弁当を作ってきていた俺の記録が途絶えたのは、

「あれ？一葉もコンビ二なのかい？」

葵もさも不思議そうに一葉に問い掛ける。

「う、うんちょっと今日は寝坊しちゃって・・・」

「寝坊って、フタチャンとミツチャンも遅れちゃうじゃん？」

「え！？や！フタバ達はガッコまだでさ！それでちょっと油断しちゃった！」

「へー珍しいねえヒト八が」

どうやら一葉も弁当派だったらしいが、べつに寝坊して弁当が作れなかったのではない。いや一葉は寝坊だったが、ちゃんと弁当は二人分用意してあったのだ。しかし一葉が、弁当が全く同じなのは流石にまずいでしょということ、仕方なく置いてきた。

今頃お留守番の二葉と三葉が喧嘩でもしながら食べている頃だろう。「ねね、サツキーはなんであたしたちと友達になってくれたんだい？」

各々弁当箱を開けていただきますを済ませてすぐ、葵は早速にも本題と言っていい質問をぶつける。

それは俺も是非お聞きしたかった。

「べ、べつに物理でちよつと一緒にただけでしょ……。つていうかサツキーって……」

「でも一緒にご飯食べてくれてるじゃん？あたしと一葉の噂知らないわけではないのに」

うつとうしそうに葵を一瞥した後、ボーイッシュな印象とは打って変わる可愛いらしいピンクの箸を弁当箱に置くと、ジーツとこの場にいる全員と眼を合わせた。

「……まあ、しいて言えば面白そうだったから……。かしらね」そう呟いて目に見えるか見えないか程度に微笑すると、また箸を手に白飯を粒単位でちびちびと食べはじめる。

「ふ、ふーん！ま、まあそんなに言うなら仲間に入れてあげないでも……。ないけど？」

そんな花咲の様子を見て、ここぞとばかりに初めて出会った時のような尊大な態度で腕を組む一葉。
なんでそこでお嬢になるんだよ。

ご飯粒鼻につけて言う台詞でもないぞ。

「別に仲間になるとは一言も言っていないわ。……。鼻、ご飯粒ついてるわよ」

花咲は黙々と自分の弁当に手をつけながら、一葉の発言にピシヤリ。
「うそどこ？！……。じゃなくて、な、なに〜！」

ガタツと椅子を後ろに倒すほどに立ち上がる一葉。妙な所でプライド高いんだな。

「というかご飯粒はいいのか。」

「そんな事だからお金持ちだなんだと勘違いされるのよ」

「・・・え？気づいてたの？」

一葉の問いに花咲は、少し一葉を一瞥して、

「登校からずっとジャージ姿の御令嬢がいるかしら」

と不敵な笑いで嘆息した。

「こ、これは違うの！・・・っていうかお金持ちが違うのは合ってるっていうか、ジャージで登校することが違うっていうか・・・・っもう！ハルキ説明して！」

「はっはっは・・・って俺！？」

無茶振りにもほどがあるだろ！

「っていうか同居してんのばれたくないのにここで俺に振るか普通！？顔真っ赤にしてわたわた胸の前で手を振りながら慌てている一葉に冷静な判断は無理なようだった。急に視線と矛先が俺の方に向けられたため、事前に考えてあった完璧な言い訳など宇宙の彼方へ飛んでいってしまったようだ。」

「・・・なんというか、その・・・な？」

俺が視線を泳がせながら、新たな言い訳を開拓しようというところで、このクールビューティーはさらなる追い撃ちをかけてくる。

「・・・というかあなたたち付き合っているの？朝から仲良く登校していたみたいだし」

「は、は、はあ！？付き合ってたんだ・・・ないわよ！あるわけ・・・な、ないじゃない！」

朝目撃されてたんですね。

「というか一葉さん、あなたもそんな顔をたこのように真っ赤にして全否定せんでも・・・。だんだん俺の居場所がなくなってきたよ。一葉は息を荒げながらコンビニそばろ弁当をがつ食いする。」

「まあまあヒト八落ち着いてっ！付き合ってる付き合っていないはま

あ置いておいて、いつのまにハルくんと仲良くなっただい？」

怒る一葉を制して、葵は興味津々といった表情であまり聞いて欲しくない質問をぶつける。

「そうそう！登校るときも、かなりハルっちゃんのウチの近くから既に一緒に歩ってたしよお」

「余計なことを言うんじゃない!?」

筑紫がさらなる言い訳必要な懸念材料を増やしてくれやがった。くそ、まだ考えがまとまってないっていうのに！

「そうだな」。碧原が初っ端からジャージ姿っていうのも気になるしな」

サクマ、お前もか。

ああもう今まさにカエサルのが持ちが痛いほどわかるよ。佐久間くん、君だけは僕を裏切らないと思っていたのに。ただ確信犯だったブルータスと違って、無意識で核心を突くような攻撃をしてくる佐久間は厄介極まりない存在である。

「命の・・・恩人かな」

頭の整理のつかない俺を現実に戻したのは、囁く様に発した一葉の言葉だった。

「ハルキはね・・・枯れ切った雑草に水をくれて生き返らせてくれた、私の恩人なの」

憂いを帯びた表情に控えるように見せる微笑が、俺の眼にとっても優しげに、そしてとても美しく映させた。

・・・鼻にご飯粒付いてるけど。

「ヒトハ・・・」

「・・・や！雑草とか水とかは何というか・・・例えば！そう比喻表現というか！・・・うう、・・・！そう！私が制服で川で溺れてるところを助けて貰ったのが本当のお話！制服がボロ雑巾に大変身しちゃって、なんつって！あははは・・・」

急にまた顔を真っ赤にさせて、ごちゃごちゃと早口で捲くし立てる

一葉。そして言葉の最後で恥ずかしさが頂点に達したのか、また俯いてしまう。

というかその一瞬でばれそうな嘘はなんだよ。

それまさか先生にも言おうとしてたんじゃないだろうな？

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

一葉の急な発言に、皆箸を止めて眼を見開きながら呆然としていた。
「・・・・・・・・ヒトハ」

先陣を切って口を開いたのは葵だ。

「大変だったねえ・・・！アンタ泳げないんだから川の近くに行っちゃだめだつて言つたろう？」

何やら瞳に涙を浮かべながら俯く一葉の頭を撫でる葵。

「・・・・・・・・・・・・・・・・え？これ信じたの？」

「おいおいマジかよ！結構な事件じゃんか！いやぁ本当良かった！俺がハルっちゃんを育てた甲斐があつた！」

筑紫も大層驚いたように見せて体全体を使つて一葉の生還を喜んでゐる。何度も言うがお前に育ててもらつた覚えはないけどな。

「そうだったのか！ハルキすごいな！溺れている人を助けるなんてなかなかできることじゃないよ！」

あの秀才佐久間でさえも、まさにお前の喜びは俺のもの、俺の喜びも俺のものと言わんばかりに、オーロラのような笑顔を振りまいてくる。

ちよつと待つてくれ、これつてリアリティある話かな？

事情を知っている身としては、学校サボりの理由に「父が危篤で」の次に胡散臭い理由だと思つてゐるんだが。まあ火事のことと同居してゐるってことも事情を知らない側からしたらかなり胡散臭い話ではあるが。それでも、人の命が救われたことに素直に喜んでくれるやつらがいる。そんなアホで純粋なやつらの方が、一緒にいて楽しいことも確かなのだ。だから俺は、見た目どうにも合いそうにない筑紫と佐久間とつるんでいるんだ。そして葵も花咲も、そういう心を持つてゐるから、こうやっていつのまにか集まつて笑いあつてゐる

だろう。

嬉しいのか感動しているのか、一葉は未だ俯き葵に撫でられながらうんうんとしきりに頷いている。

理由が嘘でも、これだけ心配されれば、嬉しいだろうな。

「・・・新学期早々に何事もなくて良かったわね。それで碧原さんは草野くんが好きになっちゃったのね」

「うん・・・ん？ってだから違あああああああ
あう！」

このクールビューティーもどこか抜けている娘である。

第2章 完

Brake

「ただいま」

学校を終え、帰りに一葉と夕飯の材料を買いに行き、我が家に到着現在18時前。学校は4時前に終わり、平常通りであれば一度家へ帰って自転車を走らせ、麓の小さなスーパー南田でさっさと材料調達を終えて、5時には家に着いている筈である。

しかし一葉は、

「え？このまま行ったほうが早くない？」

と俺の数少ない楽しみである放課後サイクリングロードをあつさり棄却して、麓の小さなスーパー南田・・・ではなく、その向かいの大型ショッピングモール「ハナオカ」へと足を向けた。何故かと言えば、スーパー南田には約束を交わしあつた友人がいるのだ。約束の共有と言うものは、お互いを信じようとする心生まれるもの。葵は何やらバイトをしている事を親友の一葉にも話していないようにだし、まあ俺がたとえこの事をばらしてしまったとしても、あの葵が腹いせに俺の一人暮らし情報をどこぞのB級ドラマよろしく公にしたりはしないだろう。それに葵はそんな約束抜きでも友達でいたいと思っっている娘だ。

ここは現場から離れた方が無難だろう。

おっと、今は一人暮らしじゃなかったな。

まあそんなわけで、俺はスーパー南田の存在は言わず、ハナオカへと自然に歩を進めたのだった。

ここまでは良かった。一葉の言う通り、時間短縮という点では一度家に戻るよりは格段に早い。まあ前からわかつてたことではあるが、ただハナオカに着いてからが問題だった。

とにかく長いことこの上ない。

一葉の買い物はそれはもう東京の各駅停車のように、各コーナーでその都度止まって色々な物に興味を示す。そしてまるでアイスクリ

ームを買ってほしい子供のようなウルウル輝く瞳でこちらを伺ってくるもんだからたまったもんじゃない。特に洋服コーナーではあれやこれやと試着も繰り返し返していたために、俺もついついこう言うしかなかったのだ。

「あ、明日は休みだからさ！四人で来たときにしようぜ！」

・・・まあ仕方ないさ。

一葉たちの可愛かったであろう持ち服は全てエージェント御用達の黒服、・・・いやまあ悪く言えば炭と化してしまったわけだし、女の子が洋服に興味ないわけない。制服も買い替えなければならないし。

ああ、俺の怠惰で平穩で平和で淡々とした休日が・・・。

そんなことを頭の中で呟きながら、洋服コーナーに居座る一葉を無理矢理引きはがして帰って来て、現在こんな時間である。というか学校から直接来ると帰りがきついことにも気づいてしまった。どっちにしろ変わらないのかもしれないな。

「ヒトハハルキおかえりー！」

今だ貸している俺のロングTシャツを揺らし、頭の上で音符マークを浮かべてるようなテンションで二葉が出迎えてくれる。

「ちゃんと留守番してた？」

「うんしてたぞー！お昼にオオヤがなんたらごぼーとかいうの持ってきてくれた！」

にひひとはにかみピースサインの二葉。

おばちゃん呼び捨てかよ。

というかそれ名前じゃねえよ。

「ミツバー！起きろー！ごはんだぞー！」

靴を脱ぎ、台所脇を通って居間に行くと、先程まで寝ていたらしい三葉が二葉に起こされ、眠そうな眼をこすっていた。

「・・・耳元で大声ださなくても・・・聞こえる・・・」
「・・・おかえりなさい」

少し機嫌が悪そうに二葉を一瞥した後、こちらに気づいて三葉は少

し頬を緩めた。

「ただいまミツバ。眠くなっちゃったか？」

「……………ん、大丈夫……………」

三葉は軽く下唇を噛んで今だ眠そうな眼で遠くを眺めながら答える。女の子座りでうとうととしている姿はまるで子猫のようだ。

「へへー！ミツバはごほんの事言うとすぐ起きるんだくいしんぼー」

「それはフタバだろ！フタバカ！」

「あー！フタバとバカをくつつけたー！？それならミツバはミツバカだ！」

「なにをー！」

またしょうもない小突き合いの喧嘩を始める二葉と三葉。まあ三葉が年相応になるのでこれはこれで面白い。二葉は少し小6にしては少し子供すぎるが。

「今日は私たちが夕飯当番だよな」

「おお、そうだな。じゃあ悪いけど宜しく頼むわ」

二人の小突き合いは無視して、一葉が腕まくりをしながらやる気に満ちた表情を見せてくる。そういえば、女の子からの手料理なんて初めてだな。これは役得役得。

「おっけー！じゃあミツバお願い」

「え？」

三葉は二葉を攻撃していた小さいグーの手を解いてこちらに振り向いて、小さく頷いた。

「お、なんだお手伝いかあ。偉いな」

「私がお手伝いだよ」

お手伝いという言葉が発せられたのは、相変わらず眠そうな眼でふらふらと台所へ向かう三葉ではなく、俺の隣で綺麗に切り揃えられた爪がつく人差し指を自分に向け、満面の笑みで立つ一葉であった。

「は！？三葉が作るのか！？」

「そー」

語尾にハートでもつきそうなほどに可愛く答えて、「ミツバ、私

なにすればいい？」などと言いながら三葉の方へ向かった。

三葉って料理できるのか！

何から何まで大人びてるな。というか末っ子って甘えん坊だとかとなんかの本で見た気がするんだが、全然そんなことないんだな。俺なんかよりもずっとしっかりしてるわ。そんな事を考えながら、手持ち無沙汰になった俺は、ふと遊びの相棒を失って同じく暇という宝を手に入れた二葉と眼が合った。

「・・・二葉はお手伝いしないのか？」

「だって手伝うとミツバがうっさいんだもん！あんたは食べる係とかいってのけ者にするんだ！」

大体想像はつくけどな。

「・・・フタバはすぐ余計なことするから・・・」

「この前だってちよつとミツバの顔にお塩ぶっかけちゃっただけじゃん！」

それは誰でも怒るぞ。

三葉の素っ気ない指摘に二葉は頬を膨らませ、台所で手際よく野菜を洗っている三葉の後ろ姿を睨んでいる。

「そうだフタバ、ちよつと外散歩しにいくか？」

ここでテレビ見て笑ってるのも邪魔になりそうだしな。

「え！？ホント！？行くー！」

頬に膨らませていた風船を一瞬で割って、猪も顔負けのタツクルで抱きつく二葉。胡座を搔いていた俺は少し後ろにのけ反って、二葉の体重ごと堪える。

「もう暗いけど今日は晴れてるし、もうちよい上に向かえば星が見えるかもな」

「星かー！綺麗か！？」

「そりゃあもつ」

「おおお！行こ行こー！」

二葉は勢いよく立ち上がって、俺の手首を掴みぐいぐいと引っ張ってくる。

「おおおいおい、そんな引っ張るなつて。つうわけでヒトハちよつくら行つてくるから」

「はい、7時までには戻つて来てね」

一葉は肉を切りながら、目が離せないかわりに、声だけかけてくれた。

「ハルキはーやーくー!」

「ちょ、待てまだ靴履けてない!」

「おおおおわあああ!すっごいきれーだー!」

通学路とは反対側の坂を少しのぼつて行くと、車のすれ違いスペースが設けられている所がある。そこだけは空を隠す木々がなく、麓の町並みも一望でき、上を見上げればそこはセルフプラネタリウムだ。

「どうだフタバ、綺麗に見えるだろ?」

「うんうん!すっごいすいこまれそー!」

これ以上首が曲がらないほど上を見上げ、二葉の無垢な輝く笑顔は夜空の星々にも負けないほど綺麗に見える。姉に似て、整いすぎている顔の造形は、暗い中でも確認できる。

そういえば、星をまじまじと眺めたのはいつ以来だろう。よく小さい頃、親に連れられて星を見に行った覚えがある。当時の事はあまり記憶にないが、その時みた流星群の映像だけは今でも頭に焼き付いている。二葉の言う通り、不規則に流れる流れ星が、俺を吸い込んでくれるようなそんな錯覚。

「・・・フタバ、流星群つて知つてつか?」

「りゅーせーぐん?」

「流れ星は知つてるだろ?」

「うん!」

「その流れ星が、シャワーみたいに夜空を彩るんだ」

「シャワー!?それつてすごい数なのか!?」

「数え切れないほどさ！お願いだってたくさん流れれば3秒なんて関係なしだ」

「すげー！見たい見たい！」

「今度四人で見に行くか？」

「おお！行きたい行きたい！いつ見に行く！？」

「そうだな、結構周期的に見れるらしいから、今度調べておくよ」
「そつか！へへー楽しみー！ハルキ好きだあー！」

何故この流れで好かれるのかはわからなかったが、二葉は大層嬉しそうに俺の腕に抱っこちゃん人形のように抱きついてくる。へへーと独特にはにかむ笑顔につられて笑ってるしまうのは、二葉の天真爛漫な人懐っこい性格が成せる業なのだろうか。

そのままの状態で俺達はしばらく星を眺めていた。春の少し冷たい夜風が肌を撫る。傍から見ればロマンチックなカップルにも見えるが、どちらかと言えば仲の良い兄妹、はたまた身長差があるので関係良好な親子という感じだろうか。

・・・流石に兄妹で腕組はないか。

そんな事を考えていると、二葉はさらに頭を俺の腕に埋ませてくる。

「・・・きつとね・・・、わたしだけじゃないんだ・・・」

ヒト八だつてミツバだつて

そしてふと囁くような二葉の一言。

その言葉につられて二葉に眼を向けるが、表情は見えない。ただ腕に纏わり付く二葉の体温が少しあがるようにも感じた。いつものように白い歯を見せはにかんでいるのか。ただ声の調子は、いつもの幼さを含んだ物ではなく、落ち着いていて、それでいて温かく、優しい声であった。

「だつてさ・・・・・・んーんやっぱいいや！」

腕に付けていたおでこを離して、俺を下から蕩けるような笑顔で見上げる二葉。

「へへーハルキもう帰ろー！おいしーごはんが待ってるのだ！」

「・・・はは、フタバも十分食いしん坊だな」

「えー！ちがうよー！」

いいからいいからとぐいぐい俺の腕を引っ張る二葉。それに引きずられながら、さっきの言葉を頭に巡らす。

わたしだけじゃないんだよ。

この言葉はどこに繋がるんだろう。二葉が見せたほんの少しの胸中。ただ流星群が楽しみだというだけか、それとも・・・？

まだ出会って間もないのに、どうしてここまで信頼してくれるのだろう。

この言葉に隠された意味を、この時の俺はまだ気づく事などできやしなかったのだ。

家に帰ると既に夕飯の用意はされており、何故か遅いと怒られてしまった。

まだ7時回ってないのに・・・。

でも、家に帰ると飯が用意されているなんて、いつ以来だろうな。なんだかジーンときちゃうな。

三葉&一葉の特製極上回鍋肉を平らげて、9時過ぎまでだらだらと居間のテレビを見ながら談笑。その後は部屋も分かれて各自就寝に向けて用意といったところ。特になんの問題もなくその日は終わるはずだった。俺はここ最近の急な状況変化のためか、布団でだらだらと小説を読み耽っていたが全く頭に入ってこず、そのままあっさり睡魔に主導権を握られてしまった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・ルキ・・・・」

遠くの方で誰かが呼ぶ声がある。

「・・・・・・・・ハルキ・・・・・・・・」

身体を揺すられて、俺は暗闇の世界から解放された。いまいち焦点の合わない眼を凝らして、声のする方へ振り向くと、そこにはいつもポニーテールをおさげにしている筈の三葉が、さらっと流れる髪そのままに、枕を大事そうに抱きしめながら立て膝を立てていた。

髪を下ろすとそのままミニ一葉だ。

「……………ん、ミツバ……………どした？こんな時間に……………」

時計に眼を向けると午前2時過ぎ。丑三つ時といわれる頃だ。

「……………な、なんか窓が揺れてて……………」

「窓？」

そういえば俺の寝ている居間には雨戸があるが、向こうの和室には雨戸がない。窓の建て付けが悪く、風や雨が強いと音を立ててかなり揺れる。向こうの部屋ではさぞ「お前も巻き込んでやる」と言わんばかりに窓が奇声をはいているだろう。

小学四年生にはまだ怖いかな。

「ミツバ怖いかな？」

「え、や！怖くなんかなくて、ちょっとうるさいなあとと思って……………眠れなくて……………」

そうか怖いのか。

三葉にいつもの余裕はないようで、枕をぎゅーっと抱きしめ、あたふたと身体を揺らす。よく見れば震えているじゃないか。

「こっちはあんまりうるさくないけど……………俺が向こうに行くわけにはいかないし、ミツバがいいなら隣で寝とくか？」

自分の布団の隣を指しながら促すと、三葉は髪を大きく揺らして首を二回縦に振った。俺が布団を開くなり、逃げ込むように俺の右隣の布団の中に侵入を図る三葉。それにしてもさっきまでは気付かなかったがかなり大雨だし風もあるみたいだな。

「……………」

「……………」

お互いに背を向けるようにして、無言の状態が続く。無言なのは寝ようとしているので当たり前ではあるが、変な時間に起こされてしまったため、妙に眼が冴えてしまった。隣の一葉たちの部屋ほどではないが、先程までは気にならなかった雨風の音も、今ではイヤに耳に入る。

「……………ハルキ……………もう寝た……………」

そんなことを思っていると、既に眠り姫になったと思っていた三葉が声をかけてきた。

「ん、まだ起きてるぞ」

「……………そっか……………」

「……………？おう、どした？」

布団の中でもぞもぞと動く三葉。

「……………手……………」

「て？」

耳に入る一言では意味がわからなくてそのままに聞き返すと、三葉はまた口を紡ぐ。三葉は俺の後方で何やら深呼吸でもしているように背中を大きく動かしている。心なしに背中に感じる三葉の体温もやけに暖かく感じる。

「あの……………手……………繋いで……………いい……………？」

「え？手をか？」

「あ！やつぱりうそ！今のなし……………！！」

「……………こうか？」

三葉が慌ててこちらに振り向いたのと、俺が仰向けにして手をとったのがほぼ同時だった。何かを言いかけていた三葉は俺が手を握るや一度驚くようにビクツとしたが、すぐに手を握り返してくれた。すごく小さな手で、少しでも強く握ってしまえば折れてしまいそうだ。

「……………ねえ……………ハルキは……………」

「ん……………」

三葉はまた何かいい掛けて、そのまま続く言葉を口にしまふ。迷っているのか、躊躇っているのか、三葉はしっかりと俺の右手を握りながら黙りこくる。

「……………あ……………えっと……………そだ、今日のごはん……………おいしかった……………」

え、そんなこと？

もつと重要な話を切り出されると思い、若干の拍子抜け感が否めな

いが、よく考えれば彼女はまだ小4の子供なのだ。少し大人じみた言動や行動で忘れがちになるが、可愛らしい様や怖がる姿だつて見る普通の娘だ。先程の二葉の意味深な言葉のせいで、また何か言われるのではと過敏になっていたらしい。

「おゝめちゃめちゃ上手かつたぞ。いつから料理してるんだ？」

「・・・ん、小学校入学してすぐ・・・くらい・・・」

「まじかよ。そりゃ料理の腕もあがるつてもんだな」

横に振り向いて三葉の顔を覗こうとするが、三葉は反対に向いていて顔は覗けない。ただ暗い中でもわかるくらいに耳が真っ赤に染められていて、どうやら照れている様子であつた。

「・・・ハルキは・・・何が好き・・・？」

「料理か？たいていのモンは好きだけど、いやあでも今日の回鍋肉は最高だつたなあ。大好物なんだ」

「・・・・・・そつか」

「おう」

「・・・じゃあ、毎日作る・・・」

「嬉しいけど、流石にそりゃあ飽きるぞ」

「・・・・・・フフ・・・」

ようやくこちらを向いてくれた三葉は、頬をばら色に染め、少し遠慮するように微笑した。その大人びているようで、無邪気な様子も絡まず笑顔は、暗い部屋の中でも輝いてみえるようだった。

「・・・おやすみなさい・・・」

「おうおやすみ」

結局その後も三葉は俺の手を握りっぱなしで、普段にないシチュエーションにいまいち眠気を催すことができず、悠久の夜を過ごすことになるのだった。その隣で三葉は穏やかな表情を浮かべ、とても幸せそうに寝息を立てていた。

「・・・・・・うん・・・むにゃ・・・・・・ソフトクリームおいひ・・・・・・」

・・・どうやら二葉の三葉情報はかなり確かな情報筋らしい。

第3章 (1)

土曜日とんで日曜日。

買い物予定であった土曜日は時期不相応の激しい雷雨によって延期となり、その振替が今日である。今日は文句なしの快晴で、太陽に「せっかくの休日くらい外に出ろ」とどやされているようだ。休日という字に「休」と付いてるのだから、本来は家にいなければならぬものだと思っただがな。

おっとまた悪い癖が。

さて、今日はショッピングモールに三姉妹を引き連れて、火事で焼かれてしまった日用品、洋服その他もろもろを今日一日で全部買ってしまったおうという算段だ。勿論金も全て俺の預金からである。

・・・まあ、俺の金じゃないし無駄に有り余る金を困っている人に使ってもばちは当たらないだろう。

「あらあら、四人でおでかけ？」

準備も整って、アパートのボロ階段を四人揃って降りて行くと、下ではいつも通り大家のおばちゃんがさつさとあるのかわからないゴミを掃いていた。四人揃って軽く頭を下げると、おばちゃんはいわつと膨らむシャボン玉のような笑顔でこちらに手を振ってくる。

「朝早く四人揃ってどうしたの？」

「一葉たちの日用品も揃えなきゃと思っただ。これからデパートでショッピングって感じ」

「そっかー楽しんできてね」

妙ちきりんな四人を端から順に見て、溶けるチーズのように頬を緩めるおばちゃん。

それもその筈、一葉は言わずもがな突出した容姿も涙するような学校の赤いジャージ上下。二葉と三葉は金曜日に買い出しにデパートに行った時に急遽購入したショートパンツに俺のＴシャツ。

俺は一人だけ着飾るのも変なので、黒のパーカーとジーパンで地味に仕上げた。どうみてもこれはデパートにショッピングというよりは、徒歩2分のコンビニにちよっくら買い出し行ってくるゝの装備である。

「おばさん、昨日はお昼にきんぴらごぼう頂いたみたいで・・・、ありがとうございました！」

一葉が深々と頭を下げるのを見て、いいのいいのと宥めるおばちゃん。おばちゃんに会うとなぜか毎度頭を下げている一葉がいることが、最近のパターンだ。

「オオヤオオヤ！今日は何くれる！？」

「バカタレ！図々しすぎだったの！」

相変わらず馴れ馴れしい二葉に戒めのげんこつを落とす一葉。

「いてー！もーヒト八殴りすぎ！バカになったらどうすんの！？」

「アンタは元からバカでしょ！」

「・・・ふふ、ホントにフタバは食いしん坊・・・」

「ミツバになったらどうすんの！？」

「それどういう意味だ！？っていうか言い直すな！」

相変わらずがやがやと揉める三姉妹をどうとと止める俺。

「お、おいおまえら落ち着けて・・・。悪いおばちゃんそんなわけでちよっくら行ってくるわ」

「ふふ、気をつけてね」

そう言っておばちゃんから眼を話し、下りの坂道へと歩を進めようとすると、

「なんだか家族みたいだな」

後ろでおばちゃんが何か言ったように聞こえたが、俺が振り向いた時にはおばちゃんはもう掃除の続きを始めていた。

「どうかな？」

俺の前でモデル顔負けのポーズをとり、俺を魅了してくるのは勿論一葉だ。あらかじめ試着の前に15着以上の候補を手に取り、長い時間品定めした後、結局見るだけでは決めきれずに現在8着目に突入中。

ふわっとしたイメージの鮮やかな薄い緑掛かったワンピースに白いカーディガンを羽織り、頭に茶色のキャスケットを乗せる程度に被っている。イメージするなら間違えてデパートに舞い降りてしまった森の妖精だ。

「お、おお・・・めっちゃ似合ってるよ」

「もーハルキさつきからそればかり！」

それは仕方がない。

一葉のその突出した容姿に似合わない服など存在しないのだ。おまけにスタイルも良く、出るところはしっかり出ているので先程からモデルが目の前でポーズをとってくれているようにしか見えない。

「他にどう言えってんだよ」

「そ、それは・・・可愛いとか・・・さ・・・」

「え？なんだって？」

声が小さくて後半が聞こえない。

「な、なんでもない！ハルキはボキャブラリーなさすぎなの！」

「そんなこと言ったってホントに全部似合ってるんだからしょうがないだろ」

これじゃあ決められないじゃん・・・などとブツブツと言いながらまたカーテンを閉める。試着室のカーテンの向こうでは既に9着目に手を掛けているころだろう。あらかじめ一人3着までと言っていることが、一葉を悩ませている原因だ。

というか制限しなかったら全部買う気だったんじゃないだろうな・・・。

恐ろしいことこの上ない。

「・・・・・・・・ハルキ・・・・」

一葉の右隣りの試着室から三葉が恥ずかしそうにカーテンを開く。おさげにしている方の肩が露出していて、そこから中に着込むタンクトップが見える。下は白いフリルの付いた黒いミニスカートを履いて、同じく黒のニーソックスで合わせている。大人になりたくて背伸びをしているような、なんとも三葉らしいチョイスだ。

「・・・・・・・・」

三葉は俺の眼をじつと見て、何かを求めるような視線を送ってくる。

「可愛いな、ミツバ」

「ほ、ホント・・・・!？」

俺の言葉に向日葵が咲くように表情を明るくする。しかし恥ずかしくなったのか、さつさとカーテンを閉めてしまった。

むう、もつと見たかったのに・・・・。

「ねー！ハルキ助けて！ひっかかったひっかかった！」

カーテンの向こうで何やら騒ぐ声。

勿論この声の主は二葉であるが引っ掛かったって？

「おーい大丈夫か？」

「ベルトが！カーテンに〜！」

「開けるぞ？」

そう言つて、カーテンを開くとベルトに付く飾りの鉄製の星の先端にカーテンが引っ掛かつていて、二葉はお尻を突き出すようななんとも間抜けな格好をしていた。また起用な引っ掛け方をしたもんだ。

「ふえ〜取れた〜・・・・」

俺がすぐにとつてやると、ようやく無理な体勢から解放された二葉は一息ついた。

二葉の格好は、モスグリーンのキャップを斜めに被り、白いカジユアルなデザインのＴシャツに、七分丈の足のラインが見えるすらつとしたジーンズを履いている。先程の二人とはまた別な路線で、ボーイッシュかつ可愛いらしいコーディネートだ。

「うん、やっぱりフタバも似合ってるな」

「ホントか！？へへー」

少し照れるように見せる二葉。

どうやら俺の審査の甲斐あって三人とも気を良くしたらしく、俺が描写した服をそのまま着ていくことにしたらしい。そのほか全員分で計6着を購入し、一葉が「また来ようね」などと言うので苦笑いだけ返しておいた。大多数参加のミスコン審査員を一人でこなすようなものだからな。

その後日用品などを三姉妹に買わせている間に、俺は事前に採寸を済ませておいた一葉の制服を取りに行った。若干受け取る時の店員の訝しげな表情は気にしないでおく。制服を受け取って、待ち合わせ場所に行くと、一体何を買えばその袋の量になるんだと言いたくなるような膨らみと量を、自分達では持てずに床に置いて、自動販売機の前で休憩していた。

「・・・おま、ちょ、マジかこれ・・・？」

「えへへ・・・ちょっと買い過ぎちゃった」

語尾に星でも付きそうにお茶目に答える一葉。

遠慮せずなんでも買えと財布の紐は緩めてはいるが、まさかこれほどまでとは・・・。

いやたぶんいくらなんでも最初だけだろう。

そう信じたい。

生活必需品は買い終えて、そろそろデパートを出ようかと出口に向かって歩いてみると、明らかに三葉の視線はある一方へと釘付けになった。その視線の先は、この辺りではかなり上手いと評判のアイスクリーム屋「21ICE CREAM」がある。

寝言でも呟いていたが、そんなに好きなのか。

三葉のそれは店頭に覗く色とりどりのアイスクリームを溶かしてしまっほどの熱い視線を向けている。

「ミツバ？」

「へ！？・・・・・・・・あ・・・」

先行く俺達の後ろでアイスクリームとの距離が広がるのを惜しそうに小さい歩幅でついて来る。

「・・・アイス食うか？」

「いいの！？・・・・・・・・あ、いや、フタバが食べたいなら・・・」
可愛いやつめ。

「おーいヒトハフタバ、アイス食ってかねーか？」

「あ、いいね。このアイスクリーム美味しいんだよね」

「おー！アイスアイス！あたしチョコー！」

「じゃあ私は抹茶かな」

二人の賛成を聞いてから、三葉に眼を移すと、店頭の冷凍庫を鼻がつく距離で品定めしていた。

「・・・ミツバは何食う？」

「え、えつとえつと！バナナとチョコミントとストロベリー！」

まさかのトリプルですか。

まあ、三葉の面白い様子も見れたし、これはこれでいいか。

注文を済ませ、店員のお姉さんがアイスクリームをコーンに乗せる様子をいつもとは違う爛漫な笑顔で眺めている三葉。トリプル完成品を受けとって、眼には無数の星が流れている。

「ミツバ上手いか？」

「うんおいひー！・・・・・・・・じゃなくて、おいしー・・・です・・・」

少し控えめに気持ちを抑え、三葉はコクリと頷いた。頬を朱色に塗って、それでも幸せそうな表情を隠しきれない三葉に、つつい俺も頬を緩ませずにはいられない。アイスクリームでこんなに喜んでもらえるならいつでも買ってあげたい。

そんな親バカチックな事を考えながら、俺達はデパートを後にした。

四人で歩いていると、美人三姉妹への視線がすごい。

先程まではお粗末な服装でカモフラージュされていたが、オシャレ

にコーディネイトした途端に覚醒した。まあ一葉達が注目されるのはいいが、俺の居場所がどんどん狭まってきて息苦しい。なんといつか場違い感が半端ない。

先程までは勝っていたパーカー&ジーパンも、一葉たちが変身した今となつては下剋上である。それに加えて溢れんばかりの笑顔でアイスクリームを美味しそうに食べているのだ。何かのプロモーションビデオの撮影か何かと勘違いされても不思議ではない。

「ねえハルキ？あれってドラマの撮影じゃない？」

「え！？ヒトハお前ホントに芸能界デビューしたの！？」

「は？何言ってるの、あれよあれ」

「あれ？」

一葉が指し示す先では、大勢の人ばかりと大きなテレビカメラやら大型マイクやらが、デパートの駐車場で撮影を行っている。

危ない危ない、心の中で思っていることが言葉に出てしまった。

それにしても人が多い。野次馬かと思つたが、どうやらエキストラのようだ。計30人ほどが、監督とおぼしきサングラスを掛けたおじさんに指示を受けている。

「ちよつと見に行つてみない？」

「いいけど・・・、フタバもミツバもいいか？」

「見たい見たい！ドラマ！」

「・・・ちよつと興味あるかも・・・」

全員可決で、少々の野次馬根性で撮影の輪へと近付いていく。これ以上は近寄れないという旨の所まで近付いて中の様子を見してみる。

『はい！カッター！オッケーです！』

その場にいる全員に響き渡るほどの音量が響き渡ると、周りはお疲れ〜などと撤収の準備に取り掛かり始めたようだ。

「なんだ〜終わっちゃったのか〜」

一葉が残念そうに口を尖らせてから、最後の一口のコーンを口に入れる。

「ま、しょうがないから帰るか」

「そだね」

では我が家へ・・・そう思った時だった。
ふと振り向くと、ばったりという言葉がこれほど当て嵌まる瞬間はないだろう。

クラスメートの花咲嘉穂がそれはもう目撃してしまったと言わんばかりの眼をこちらに向けていた。

「碧原さんに・・・草野くん？」

花咲は俺達を呼ぶ声とは裏腹に、視線は少し下、要するに二葉と三葉へと向いている。

何か嫌な予感がするな。

無駄に俺達の髪色が同じなために、その二葉と三葉を訝る視線はまるで・・・、

「あ、あなたたち・・・結婚していたの・・・！！？」

「って、飛躍しすぎだろ！？」

せいぜい兄妹ぐらいかと思ったけど、想像を遥かに越えた勘違いしちゃったよこの人！

「こんにちはー！ほらミツバ！知り合いらしき人に会ったらアイサッ！」

こういう面はともしっかりしている二葉が先に頭を下げて、三葉にも挨拶を促す。

「・・・こ、こんにちは・・・」

少し控えめに挨拶をして、すぐに俺の後ろへと隠れてしまう。今だけは俺の後ろに隠れてほしくない。

「あ、・・・こ、こんにちは・・・って！そ、そうじゃなくて！高校生で既に二人の子持ちだなんて、あなたたち絶対おかしいわ！」

「人聞きの悪い事を大声で言うんじゃない！？」

この前知ったクールな面はどこかに置き忘れてきたように、ひどく慌てふためいている。なんとなく感じてはいたが、かなり天然だろこの人。

「違つたよ、花咲さん！二葉と三葉は私の妹なの！」

「い、妹・・・？く、草野くん！三姉妹全員を手ごめに・・・？」

「アンタは俺をどういう目で見てるんだ！？」

これじゃあ埒があかない。

妄想が常人の遙か上へ行つてしまっているこのお方に、俺はあれやこれやと碧原三姉妹との関係性について、事細かに同居生活がばれない程度に説明してあげた。

「・・・ふーん、なるほどね、それで碧原さんを助けて家族ぐるみのお付き合いをしてるってわけね」

「この間もそう言つたろ・・・」

なんだか最近言い訳ばかりが上手くなっている気がするな・・・。
しかしばれて一葉たちの住み処がなくなるのは困る。

ここは譲れない。

花咲はまだいまいち納得していないような顔で腕を組ながらジーツと俺達をさがめ見ている。

「・・・まあ、いいわ。ごめんねおじゃましちゃって。私そろそろ次の撮影先に行かなきゃならないから」

「撮影先？」

「そ、私エキストラだけど、今放送してる深夜ドラマに出演してるのよ」

「マジで！？台詞とかあるのか？」

「一般市民だからなしよ」

これは驚いた。

なんでも、将来は女優として仕事をするのが夢であり、現在学校の合間を縫ってエキストラとして勉強中であるらしいのだ。

「ジョーさんなのか！サインくれ！サイン！」

もう既に敬語を捨てている二葉は、先程のアイスクリームのコーンに巻き付けられていた紙を差し出しながらサインをねだる。

二葉それはちよつと酷いぞ。

隣では三葉がボーっとしながら花咲の表情を見つめている。たぶん、

化粧と衣装で大人な雰囲気をこれでもかと出している花咲に見とれているのだろう。

「すごいな」花咲さん。もう将来に向けて動き出してるんだ・・・」

「そんな事・・・ないわよ・・・」

一葉の素直な感嘆の声に、微かに頬を染める花咲。一葉の言う通り、本当にすごいと思う。俺なんか将来の事なんて、今の今まで考えることもなかった。ただ普通に大学へ行つて、ただ普通に会社に入つて、その途中でほんの少しの幸せを得られればそれでいい。そのくらいしか考えていなかったから、花咲の行動力と現実を目を向けるひたむきさは、すごく尊敬できる。

「ごめん、もう行かなきゃ」

「うんまた学校で、花咲さん」

「・・・あなたたち、あんまり堂々と行動してるとそのうちばれるわよ」

そう捨て台詞を残して、花咲はエキストラが乗り込んでいると思われるバスに向かって走り出した。

も、もしかしてばれてる・・・？

少し悪戯に笑みを零して行つた彼女の表情は、そうとしか思えない。まあばれてるにも程度はあるが・・・。

ちょうどそのバスに乗り込み際、花咲はこちらに振り向いて、

「カホでいいからー！」

と一葉に向けて大きく手を振っていた。

「よかつたじゃん」

「へへへー！」

隣で驚き眼を見開く一葉に肘でちよいっとこずいてやると、大層嬉しそうに白い整った歯を見せた。

休み明けて月曜日。

どうにも休日の後の学校っていうのは体を重くさせるようで、睡魔との闘いを終えた休み時間ともなれば机に突っ伏せざるを得ない。一応授業は真面目に聞いているため、貴重な10分間を無駄に過ごすわけにはいかないのだ。

だが至福のスリーピングタイムを妨害してきたのは、眠気の一つも見当たらないミネラルウォーターのような笑顔でやってきた佐久間だ。

佐久間は俺の前の不在の席に腰掛ける。

「なあハルキ」

「……………」

「起きてるだろ？」

「寝てるよ」

バレバレな嘘について、観念して顔をあげる。

「碧原……最近笑顔増えたよな」

「ん？ヒトハ？ああそうだな、花咲とも友達になったみたいだしなあ」

最近で。同じクラスになってまだ二日しか経ってないぞ。

「ホント、筑紫じゃないけど何したんだ？」

佐久間はいつものにこやかは自分の席に置いてきたように、真剣な顔で問い詰めてくる。

一葉が笑ってる事や友達作っている事がそんなに珍しいのか？それとも俺が女の子と友達になったことが珍しいのか？ってやかましいわ！

「別に何も……。まあ俺も仲良くなったのは確かだけだよ」

「だからどうして仲良くなれたんだ？」

机に手をついてずいっと顔を近付けてくる佐久間。

妙に食いつくな……………？

「……………お前……ヒトハと仲良くなりたいの？」

俺が核心を突いてやると、近付けていた顔がみるみるうちに赤く染め上がっていく。

「いやー！そういうわけじゃあなくてな！ただほら！同じクラスだし、やっぱり仲良くなっておかないとだな！今後学校活動において

」

その後もなんか言っていたが割愛。

要するにどうやら佐久間は一葉と友達になりたいらしい。思えば佐久間もモテるはモテるんだが、友達と言えるほどの女の子っていないな。だいたい佐久間のファンって感じで対等じゃないからな。『いいんじゃない？ヒトハも友達増やしたいって言ってたし、あいつ喜ぶぞ』

「そ、そうか？」

「今話かけてくれば？そこで三人で話してるじゃん」

俺が指す先では一葉と葵と花咲が楽しそうに談笑している。

「いや、無理だ俺には」

どの口が言う。いつもにこやかに女の子に手振ってあげるように行けばいいだろう。

「自慢じゃないが俺は自分から女の子に話しかけたことはないぞ！自慢じゃねえか！自分から話しかけてなくても向こうから寄ってくるってか！

殿様かお前は！くるしゅーないってか！

すんつと胸を張っている佐久間を睨んでから、俺はもう一度机に突っ伏す。

「だからハルキに頼んでるんだ！あの輪と一緒に行ってくれるだけでいいから！」

今までに経験のないすごい力で肩を揺すってくる。

ちよ、痛い痛い！

「わーっかったよ！行くよ！行けばいいんだろ！」

くっそー俺の貴重な休み時間が・・・。

俺はもうやけくそになって、佐久間を伴って談笑の輪に向かって行

く。

「おいヒトハ」

「あ、ハルキ寝てたんじゃないの？」

話し笑顔そのままにこちらへ振り向く一葉。

「・・・このままじゃ三年寝太郎なんてあだ名を付けられかねんな。

「いや」佐久間がさあ・・・」

「みんなアドレス交換しないか！せっかく同じクラスになったことだし！」

俺が説明する前に、声高々に自分の携帯を掲げる佐久間。

全然普通に話しかけてるじゃんか。まあちよつと声が裏返っている気がするが。

まあ最初にアドレス交換を出したのはいい作戦だな。

「おーおー！サンセーサンセー！アド交換は友達の証だ！」

葵が嬉しそうに自分の携帯をいじり始める。花咲も満更じゃなさそうに何も言わずとも携帯をブレザーのポケットから取り出す。

まあこの流れの手前俺も携帯を取り出さない訳にはいかないだろう。メールとか面倒だからあんまり好きじゃないんだけどな。

「ナニナニ？なんの話してーんの？」

筑紫も集まりを嗅ぎ付けて、もうそろそろ暑苦しいマフラーを揺らしながらやってきた。

「みんなでアド交換しようって話だよ！」

葵が元気よく答えて、「あたしは準備オーケーだよ！」とテンションマックスである。

筑紫も「俺も俺も！」と相変わらずのチャラさを醸し出している。と、その横で一人俯いている奴がいる。誰であろう一葉だ。

「ヒ、ヒトハどした？」

俺が尋ねると、一葉は涙目を俺に向けながら、

「・・・持っていない」

「へ？」

「私携帯持ってないよ！」

泣きついてきた。

「あれ？ヒトハ緑のケータイどうしたんだい？」

葵が不思議そうに一葉の表情を伺う。

前は持つていて今現在ない・・・ってことは、

「携帯火事で」

「おつとおおお！そうだそうだ！ヒトハは家に忘れてきたってさつき俺に言ってたじゃんかー！！」

火事の事をあつさり言おうとするんじゃない！？

また色々ややこしくなるから！

俺は半ば強引に一葉の首に腕を回して口を塞ぎながら抱き寄せる。

（携帯あとで買い行くぞ）

そして一葉の耳元で囁いてやると、顔をトマトのように真っ赤に染めながらうんうんと頷く。

やべ、ちよつと焦ってきつく絞めすぎたか。

俺が謝って解放してやると、息を荒げながらそれでも何かを言いたげに呼吸を整えようとしている。

「と、というわけで、アドレス交換は明日！いい！？」

ここぞとばかりにお嬢に戻って、ビシッと人差し指を俺達に向けて拙い足取りで教室から去って行った。ていうかどこに行くんだ、もう授業始まるぞ。

なんというかだんだんわかってきたが、慌てるとお嬢に戻るんだな。

「な、なあハルキ・・・」

「ん？」

佐久間が両手に携帯を持ちながら目を向ける。

「俺・・・なんか悪い事したかな？」

ある意味な。

でも俺は答えないでいてやった。

第3章 (2)

あれから一葉と放課後に携帯を買いに行くも、以前と同じ携帯じゃないと怪しまれるのではという事で、前の緑の携帯を探しにシヨッピングモールハナオカへ赴いた。しかしハナオカでは目的の物は見つからず、わざわざ電車を乗り継いで花岡町よりも栄えている隣町まで行くこととなった。3軒目にしてようやく同じデザインを見つけ、帰ってきたのが21時過ぎ。流石に腹を空かせた二葉と三葉に叱られてしまった。放課後すぐに向かったのものすごい時間が掛かるあたりやつぱり田舎だなあとしみじみ思う。まあ俺は都会のごみごみした所よりよっぽどいいと思うけどな。

そして火曜日の放課後。

昨日買い溜めも済ませていつもの買い出しもないため、帰ってくるどきとさつさとラフな格好に着替えて夕飯の用意までだらと過ごし始める。二葉と三葉は夕方のアニメに食い入るように夢中になっている。俺は休日の親父のように、横向きに寝転がり手の平を枕しながら週刊誌を読み耽る。そして一葉はというと・・・

「えへへへへ」

何やら購入した携帯を四方八方から眺めながら、気持ち悪い声を発し嬉しそうにしていた。顔の整いすぎてるパーツも福笑いのようにズレさせて、畳に座布団を二枚敷きごろ寝しながら悶えている。

本当に携帯を持っていたのか些か怪しいところだ。なんか新しい玩具を買って貰えた子供みたいになってるぞ。

「はっ！そうだ！」

何かを思い出したように、携帯が入っていた箱を漁る。取り出したのは説明書だ。

「メールメールと・・・」

どうやらメール送受信の操作方法を調べているようだが・・・

知らないのかよ！？前の携帯で葵に送ったことないのか？

「よ、よし送信！えいっ！」

どうやら初メールを送ることに成功したらしい。嬉々として鼻歌を交えながら敷いた座布団からも外れ、ごろごろと畳を転がっている。すっかりうちの生活にも慣れたらしい。メールはきつと今日学校で五人とアド交換した誰かに送ったのだろう。本命葵、対抗花咲、大穴で佐久間つてとこだな。筑紫は・・・うん。

ppppppppp・・・

俺の初期設定から変えていない着信音が鳴り出した。

あれ、俺にもメールが・・・。どうせ筑紫辺りがイタズラメールしてきたんだろ。俺は食卓テーブルに発咄ってあつた携帯に手を伸ばす。

『差出人：一葉 タイトル：やつほー（＾Ｏ＾）／ 本文：きょうのゆうはんなにがいい（？―？）』

「俺ここ！ここにいるよ！？」

思わず立ち上がったてしまう。１メートルも離れてない距離でメールとか斬新だな！もはや送受信する電波が勿体ない。

しかも漢字変換はできていないのに、顔文字だけはしっかり付いている。

「ハルキ届いた！？」

一葉も同時に立ち上がると嬉しそうに俺の携帯を分捕る。

「自分が送ったメールを人のケータイで自分で見てどうする！？」

「えへへ見て、アドレス帳が溢れんばかりだよ」

俺のツツコミも届かず、一葉は更に自分の携帯のアドレス帳を一生の幸せ分の笑顔で俺に見せ付けてくる。溢れんばかりっても五人だけだな。

まあ一葉が大層喜んでいたのでいいか。

「飯は任せるよ。材料たくさんあるし」

「うん、おっけー！」

夕方なのに眩しい笑顔でグッドサインを出すと、「よし、今度は一斉送信をやってみよ！」などとまた説明書を読みはじめた。

ppppppppp・・・

少し経つとまた俺の携帯が音をたてる。

『差出人：佐久間恵介 タイトル：事件だ 本文：碧原から「碧原です！」というメールがきてしまった！どうする？』

RPGの戦闘シーンのようなメールをよこしたのは佐久間だ。事件って大袈裟な。お前は一体この事件になんて名称をつける気なんだ。どうするも何も・・・「佐久間です！」って返しておけばいいんじゃないだろうか。

俺はその旨を一言で返信してやった。すると1分も掛からずにメールが帰ってきた。

『差出人：佐久間恵介 タイトル：佐久間です！ 本文：ってハルキが返しておいてくれ』

俺は草野です！どこの世界に自己紹介を他人に押し付ける奴がいるんだ。しかもメールで。

やはりどこか抜けている奴である。あいつ最近一葉と関わってからおかしすぎるぞ。

佐久間のアホメールは無かったことにしてそのまま閉じて、俺は再び雑誌に目を向けようとするが、またまた俺の携帯は無機質な着信音を響かせる。

「今度はなんだ・・・？」

こんなにメール来るのは初めてだな。だんだん面倒臭くなってきたぞ。

『差出人：枝村葵 タイトル：しくしく（ノノ） 本文：最近スパーきてくれないね（＜|＞）もしかしてハナオカに浮気しちゃったのかな？・・・って店長が泣いてたよっ！』

葵からだった。というかどんだけ客いないんだよ。まあ店長とは顔馴染みだし常連だった俺がしばらく顔出さないととなると売上もだいぶ削られている事だろう。

現在5時。一葉と三葉はいつの間にか夕飯の支度を始めたようだし、二葉は連続でやっている次のアニメを見ている。ちなみに夕飯を用意を手伝わない二葉は朝のゴミ出しと風呂洗いという専用の持ち場がある。

どうせ暇であるし、ちよっくら顔出ししてくるのも悪くないか。まあ何も買わないんだけど。

なんとなく重い体を無理矢理起こして、一葉達が調理している台所を通り玄関に向かう。

「ヒトハ、ちよっくら出てくるわ」

「どこ行くの？」

スパー南田って言うのも変だな。

「散歩だ」

「・・・ハルキ散歩好きだよな」

「・・・なんだよ？」

「なんか徘徊してるおじいさんみたい」

「ほっとけ！」

一葉は可笑しそうにクスクスと喉を鳴らす。

「ふふ、門限7時だよ」

「りょーかい」

一葉に告げて、俺は適当にジャケットを羽織って家を出た。

太陽はリフレッシュタイムに入る寸前で、もうすっかり夜という感じだ。俺はマイ自転車を一階のアパート住人兼用倉庫から引きずり

出してサドルに跨がる。よく考えてみれば一葉たちがきてからこの自転車にも乗っていなかった。

「さみしかったか？」

試しに聞いてみても相変わらず壊れそうな音しか出してはくれなかった。

暗い坂道を慎重に降りて、木造建築の薄気味悪い学校前を通り過ぎ、後はだんだん街灯も増えて直線突き進むだけ。久しぶりに降り立ったスーパー南田の駐車場は相変わらず1、2台しか停まっていない。俺は自転車を一台も停まっていない駐輪場に停めて、スーパー南田の自動ドアをくぐった。

「・・・しゃいませ」

相変わらず買い物籠の整理をしているチャイのお姉さんが今にも寝てしまいそうな表情で慣用句を読み上げる。入って早々こんな店員がいたらそりゃ客も回れ右だろう。俺は愛想の悪い店員を一瞥してから、直ぐにレジへと向かった。確かこの時間は店長もレジにいるはずだ。

「おー！ハルくんじゃあないかつ！あたしのラブコールが実を結んだようだねっ！」

レジに向かう前に葵と遭遇した。葵は相変わらず制服姿に極太南田エプロン姿だ。きっと学校から直行で来ているのだろう。どうやら床を拭いているようで、モップを片手に仁王立ちする姿はさながら如意棒を握る孫悟空のようだ。

「ラブコールって。あ、店長いる？久しぶりに挨拶しとこうと思っ
てさ」

「店長ならあつこで死んでるよっ！」

葵は死人を指す時のテンションではないテンションで死んでいるという店長を指差す。その先には生気を抜かれたミイラのように、レジの台に頭だけ乗せてぐーたれている店長の姿があった。

「て、店長うつす・・・」

声かけづれー！

近付くとそこはお化け屋敷なのではと錯覚するような空気だ。

店長は俺の声に反応して壊れかけのブリキの玩具のように顔をあげる。

「お・・・お・・・お・・・おおおおお！草野くん！帰ってきてくれたのか！」

まるで裏切った仲間が戻ってきてくれたかのように目に光が戻る店長。

「君が最近来てくれないから、店の売上がさっぱりだったんだよ！いやあゝ助かった！生き返ったよ！」

店の売上問題を俺に一任されても。これはちよくちよく買ってあげないと店長過労死しそうだな。あ、働いてないから過労死はないか。

「でも店長今日は買いにきたんじゃないなくて、久々に挨拶しようと・・・」

と俺が零すと同時に再び頭を垂れる店長。どよんとした黒い靄が背中に見えるようだ。

「スンマセン！ここには新鮮な野菜や魚もたくさん入るし、惣菜も総じて美味だから来たいのは山々なんですけど、色々理由が重なってここにはなかなか顔出せないんです！」

「はは、わかってるよ草野くん・・・。。君もお年頃だ。こんなクソみたいなスーパーなんかより、目の前のビッグでクールなシヨッピングモールで女の子なんかときゃっきゃうふふしたいもんな・・・。」

あながち間違っていないから反論できない。あまりに俺の最近の行動を的確に当ててくるので俺は苦笑いするしかない。まさか店長見てたんじゃないだろうな。店長は死んだ魚のような遠い目で見え

るハナオカを眺めている。

店長は見た目も実際も30代。未婚。背がとても高く190センチ以上はあるだろうが、現在はかなり小さく見える。人辺りがよくとても愛想がいい。かなりの量のあごひげは人の良さを一層醸し出して、太っていたらサントクロースになれるだろうという風貌である。

「ハルくんハルくん、もうバイト終わるから一緒に帰ろうよっ！」

店長に憐れみの苦笑いを送っていると、葵が右手をあげて宣誓するように言う。

「お、おお。んじゃまた外で待つてるよ」

「おっけー！おーしラストスパートだああ！」

葵は嬉しそうに最後の仕事を終わらせに向かった。

「・・・うん、そうだ、それがいいよ。はいこれ、ハナオカの каф エ半額券。存分に使ってくれて構わないよ・・・。若いモンは若いモン同士で、適材適所があるんだよ・・・」

「あ、あざっす・・・」

店長は後ろに疫病神でも付いているかのような表情で、ハナオカの半額券を差し出す。アンタこれハナオカで買い物しないと貰えない奴じゃん。店長絶対ハナオカ結構行ってるでしょ。

俺は店長の好意（皮肉か？）を仕方なく受けとって、入口前で葵を待つことにした。

待つこと5分。葵がエプロンを剥ぎ取って「おーまーたーせー！」などと叫びながら跳ねるようなステップでこちらに向かってくる。

「お疲れ、ほらよ」

俺は劣いの言葉を掛けて、買っておいたコーヒーを差し出す。

「わたしにかい？」

葵は驚いたようにコーヒーを見つめる。

「あ、コーヒーダメだった？」

「う、ううん！ありがと〜！」

くすぐったそうにはに cand、コーヒーを受け取る葵。
頬を赤らめて笑う葵に思わずドキリとさせられる。

俺達はまたいつぞやのように、俺は自転車をひきながら、葵は徒歩で進み出す。

「ハルくんあのさ・・・」

「ん？」

葵は何かを言いかけて、少し躊躇うように俯く。

「どした？」

再び続きを促しても、葵は迷うようにその言葉の先を出そうとしない。

「ん・・・なんていうかさ・・・」

葵はちらちらと上目遣いでこちらを伺っている。

「相談でもなんでも話せよ。友達だろ？俺ら」

前に葵と南田帰りに宣言されたものを引き出す。

「そ、そうだね・・・さ、最近さ！一葉と・・・そう！最近仲良
いよね！」

「え？あ、ああそうだな・・・」

急に一葉の話を振られて若干焦った。何やら花咲にはもろもろばれて
てそんな感じではあるし、葵にも筒抜けなんじゃないだろうな。

「なんていうか・・・さ・・・一葉と・・・付き合ってるの
？」

「ブッ！」

思わずコーヒー吹いちまった。

「ちよい！ハルくん大丈夫！？」

「ゲッホゴッホ！つ、付き合ってはねえよ！」

「は・・・か」

コーヒーが気管に入ってつい口が滑ってしまった。

何やら葵が呟いた気がしたが、俺の耳には入ってこない。

というか、そもそも何故隠さなければならなんだ？よく考えてみ
れば学校に公にならなければ友達くらいになら話しても大丈夫な気

がするけど・・・。

葵は、むせた俺の背中を優しくさすってくれている。

「ん〜なんつうかな・・・」

「い、いいんだよ！友達同士でだって隠し事はあるしっ！・・・・・・
でもね、」

明るく振る舞う葵の表情は自嘲するように苦笑いに变化する。

「辛いことがあったのに、相談してもらえなかったっていうのは・・
・ちょっと堪えたかなっ！へへ・・・」

ぼけつと下でぶら下げている学校鞆を蹴飛ばす。

葵が言うのは一葉が溺れたってことになっている件についてだろう。
俺はその件に関与していることになっているし、最近の一葉の様子
から大体察していたのかもしれない。

「そう！きつとこれは嫉妬なんだよっ！・・・・なんだかさ、最近一
葉を取られちゃったみたいに感じるんだよ・・・・・・」

俯きながら感情を道路に吐き捨てるように話す。心なしか歩くスピ
ードも緩めている気がする。

「あたしさ、一葉にはたくさんたくさんたーっくさん感謝してるん
だよね」

「・・・・・・馴染めない一葉の近くにずっといてくれたのはおま
えじゃないか」

葵は俺の言葉に足を止める。

「ちがうよ、ちがう、ちがうんだ。そうじゃないんだよ」

そして、雑念を振り払うように頭を振る。

掌を負の感情を包むように握る。

スチール缶を持つ手も震えている。

「・・・・・・何がちがうんだ？」

俺は平淡に問う。

葵は答えないで、ただ俯いている。下の道路に答えを探すように。

「・・・・うん、秘密だよ、これは」

「それじゃ、堂々巡りだな」

ひたすら考え抜いて出した答えはシークレットだった。

「へへ、ごめんね。でも、これだけは言わせて・・・」

葵はそう零すと、ようやく垂れ下げていた顔をあげ、

「一葉のピンチを独り占めしないで欲しい。気づいているのに助けられないのは・・・辛いんだよ」

暗い背景にも咲かせるその花は、とても弱々しく儚いものだった。

鈍感な俺にも葵のいつもの、俺の知っている葵の笑顔じゃない事はすぐにわかった。葵の話からは葵が抱いている一葉へのただならぬ想いは見えない。ただ葵も一葉の幸せを願っている。心から。それは痛いほどに伝わってきた。

でも俺はすぐに答えを告げることができなかった。一葉との共同生活のこと、一葉が火事被害に遭ったこと、その他ここの一週間のこそとした行動のこと。総ては俺も一葉の、そして二葉と三葉が楽しく豊かに幸せに暮らせればいいと思っっているからの行動だからだ。俺にとっても一葉達に関して、あの日から人事ではなくなったからそう思ってた。

でも、違うのかもしれない。

同級生の、しかも男子生徒の元での同居なんて、一葉にとって本当に幸せなことではない。こそこそと世間に公になるのを恐れて友達にも嘘をつき続ける毎日なんて息苦しいだけだ。

葵に総ての事情を説明して、一葉たちを匿ってもらえばいい、そう思った。それで総て上手くいく。俺の脳はそう指令を下した。はずだった。

しかし俺の気持ちは声となつて出ない。喉をコルクの栓で蓋をするように、声にするのを何かが拒んでいた。胸のうちに渦巻くもやもやとした気持ちにさらに追い討ちをかける。

「あはは、まあそんなに考え込まないでっ！気が向いたらでもいいから教えてね！」

様子のおかしい俺に気を遣うように、会話を切る葵。

気付けば別れの交差点に差し掛かっていて、葵はコーヒーのお礼を

置いて、素早い猫のように暗闇と人込みに消えていった。

「はは・・・なんだろう」

俺は誰に問うでもなくひとりごちて、自転車に跨がった。
誰も答えてはくれない。

自分にもわからない。

「ただいま・・・」

「あ、お帰り。もうそろそろ夕飯できるよ」

我が家と外を繋ぐドアを開くと、食欲をそそる匂いが俺の鼻と胃袋をくすぐる。一葉はお味噌汁用のお玉を持ち上げて、可愛いらしく出迎えてくれた。一週間前には有り得もなかった光景だ。そして三葉はというと、何やら真剣そうにフライパンと睨めっこしている。
「・・・・・・よし・・・・あ、ハルキおかえり・・・・」

どうやらオムライスを作っていたようで、綺麗な楕円で鮮やかな黄色で包まれていた。

包むのに成功すると三葉もこちらに顔を向け、オムライス同様鮮やかな、それでいて控えめな笑顔をくれる。

「ん、ただいま・・・」

「・・・・・・あれ？なんか元気ない？」

「え、あ、そんなことないぞ！」

我ながら芝居の才能はない。俺はデビルビルダーのように腕をあげて空元気を見せる。

「あ、もしかして卵半熟の方がよかった？」

「え、ああ、いや・・・」

どっちつかずの曖昧な答えに少し首を傾げる一葉。

「半熟は私も三葉も作るの苦手だよ。失敗して中途半端になるの

もやだつたから普通のにしちゃった」

ぺろつと舌を出して悪戯に笑う。

「半熟なら俺作れるけど・・・今度作ろうか？」

「ホント！？じゃあじゃあ！半熟卵にハッシュドビーフかけたやつがいい！前に一度だけ三人で食べに行った事あって、すごく美味しかったの！」

「レストラン級までにはいかないけどな」

一葉は最高潮に嬉しそうに、先ほど三葉が巻き上げたオムライスに温野菜を添えている。

今度作ろうか？

きつと作る機会はもうないだろう。そしてこのわいわいがやがやとした夕食の団欒もなくなるだろうし、夕食後の語らいの一時もなくなるだろう。

でもそれでいいのだ。最初からこの生活には無理があつたんだ。一葉も次の所が決まるまでと言っていたし、葵にお願いすれば断るわけがないのだ。

そう、俺はそれまでの代理。

今日で俺の役目はおしまい。

和室のテーブルには豪勢な温野菜添えオムライス、中央には取り分けのサラダ、コンソメスープのおまけつき。彼女たちのとびつきり特製料理も食い納めだ。

この時間ぐらいいは深く味わってもいいよな？

「おっしやー！うまそー！食うぞー！」

「ハルキ急に元気になったね」

「こんな上手そうなもん目の前にして元気ない奴がいたら、俺が張っ倒しちゃうぜ！」

俺の言葉に三葉は頬を染める。

『いただきます……!!』

第3章 完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6293y/>

クローバー

2011年11月30日21時23分発行